

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 22 号, 2019 年, 抜刷 (pp.3-32)

<論文 特集>

メソアメリカの複雑社会の起源・形成・衰退に関する

比較文明論研究

青山和夫 (茨城大学)、嘉幡 茂 (京都外国語大学)、
塚本憲一郎 (カリフォルニア大学リバーサイド校/山形大学)、
市川 彰 (名古屋大学)、福原弘識 (埼玉大学)、長谷川悦夫 (埼玉大学)

A Comparative Study of the Origins, Formation and Decline of Complex Societies in Mesoamerica

Kazuo Aoyama (Ibaraki University), Shigeru Kabata (Kyoto University of Foreign Studies),
Kenichiro Tsukamoto (University of California, Riverside/ Yamagata University),
Akira Ichikawa (Nagoya University), Hironori Fukuhara (Saitama University),
Etsuo Hasegawa (Saitama University)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』22, 2019, pp.3-32

<論文 特集>

メソアメリカの複雑社会の起源・形成・衰退に関する 比較文明論研究

青山和夫（茨城大学）、嘉幡茂（京都外国語大学）、塚本憲一郎（カリフォルニア大学リバーサイド校／山形大学）、市川彰（名古屋大学）、福原弘識（埼玉大学）、長谷川悦夫（埼玉大学）

【要旨】

本論では、マヤ低地、メキシコ中央高原、メソアメリカ南東部と中央アメリカ南部の事例研究を通して、複雑社会の起源・形成・衰退のプロセスを実証的に比較検討する。公共祭祀を形作り物質化されたイデオロギーは、地域間交換など他の要因と相互に作用して先古典期マヤ文明の複雑社会の形成に重要な役割を果たした。メキシコ中央高原では、先古典期中期以降に「水の山」信仰を基にいくつかの拠点で都市化が始まったが、ポポカテペトル火山の噴火などの自然災害によって交易システムが解体し、人口変動が引き起こされてテオティワカン、 Cholula や Tlaxcala といった少数の都市に人口が集中するようになった。古典期マヤ文明のセイバルの都市は人口増加や環境破壊だけでなく、戦争によっても衰退した。エル・パルマルでは、周縁部のエリート集団を含めた支配層の派閥争いが都市王朝の衰退に関係していた。テオティワカンでは、中央集権化後に台頭した新しいエリート集団による競合が都市の衰退に関与した。一方でメソアメリカ南東部のチャルチュアパやサン・アンドレスでは、他地域の社会情勢や流行に柔軟に対応しながら社会を変化させることによって持続性の高い社会を形成していった。中央アメリカ南部は、古典期終末期と後古典期の民族移動によりメソアメリカ化した。新たな環境への適応の必要性、移動・輸送手段及び地域間交換の制約により大規模な複雑社会は形成されなかった。

【キーワード】

複雑社会、比較文明論、メソアメリカ、人口、環境、戦争、交換、イデオロギー

【目次】

1. 問題の所在と本論の目的
2. 長期間の社会変化の事例研究
 - 2-1. マヤ低地のセイバル
 - 2-2. マヤ低地のエル・パルマル
 - 2-3. メキシコ中央高原のトラランカレカ
 - 2-4. メキシコ中央高原のテオティワカン
 - 2-5. メソアメリカ南東部のチャルチュアパとサン・アンドレス

2-6. 中央アメリカ南部のニカラグア太平洋岸

3. 社会変化の要因の類似性と変異性

4. まとめ

1. 問題の所在と本論の目的

複雑社会 (complex societies) の起源・形成・衰退のプロセスの解明は、人類の文明とは何かを考察する上で本質的に重要な興味深い学問的な問いである。メソアメリカ文明は、旧大陸 (ユーラシア大陸とアフリカ大陸) 社会と交流することなく、アメリカ大陸で独自に興隆した一次文明であった [青山 2007; Carmack et al. 2007]。一次文明とはメソポタミア文明、古代中国文明やアンデス文明と同様に、もともと何もないところから独自に生まれたオリジナルな文明を指す。一次文明は世界に四つしか誕生しなかった。つまり、メソアメリカ文明は世界に四つしかない「世界四大一次文明」の一つをなす。古代エジプト文明、インダス文明、ギリシア、ローマや日本をはじめとして、世界の大部分の文明社会は一次文明との交流の中でその刺激を受けて成立した二次文明やその周辺で興った文明である。

旧大陸の諸文明では地域間で物品や情報の交流があり、相互に影響しながら展開した。人類史における古代アメリカの二大文明の特異性は明らかといえよう。メソアメリカ文明とアンデス文明は、長い年月をかけて個別に発展を遂げたという点において人類史で重要な位置を占める。メソアメリカ文明の研究は、人類の文明の起源と形成を理解する上で欠くことのできない極めて重要なデータを提供する。メソアメリカ文明の大きな特徴は多民族、多言語から成り立ったものであり、共通の知識が異なる民族、言語によって具現の仕方を異にする点にあった。たとえば、暦や文字は観念として共通項を含みながら、具現化された形はそれぞれ異なる。その他の文化現象においても同様といえよう。

ところが近年のメソアメリカ考古学研究は、地域・時代毎に専門化・細分化され、地域史を解明する方向に向かっている [e.g., Nichols and Pool 2012]。筆者らは各地域の社会変化を人類史やメソアメリカ全体の大きな枠組み

から理解するためにメソアメリカの諸社会を通時的に比較する共同研究が必要であると考へた。各地域の事例研究から得られる成果や知見を基に、マクロな視点からメソアメリカ文明の盛衰を理解する試みである。

科研費新学術領域研究「古代アメリカ比較文明論」(平成 26-30 年度、領域代表: 青山和夫) のメソアメリカ文明論班は、マヤ (Maya) 文明のセイバル (Ceibal) 遺跡とエル・パルマール (El Palmar) 遺跡、メキシコ中央高原のトラランカレカ (Tlalancaleca) 遺跡とテオティワカン (Teotihuacan) 遺跡、メソアメリカ南東部 (Southeastern Mesoamerica) のチャルチュ

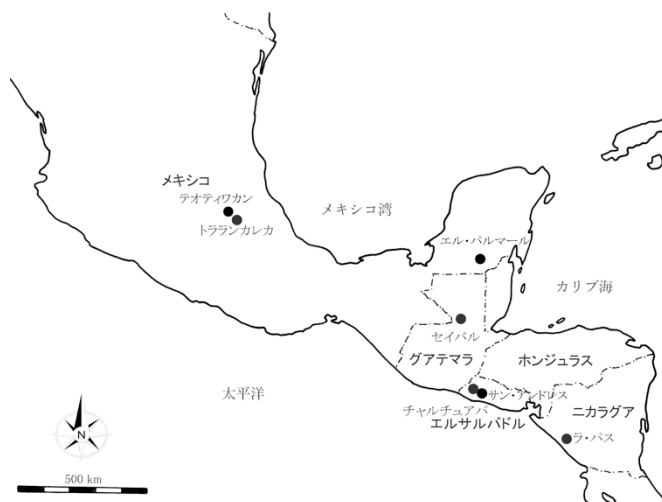


図1 メソアメリカと中央アメリカ南部: 本論で言及した主要遺跡

アパ (Chalchuapa) 遺跡とサン・アンドレス (San Andrés) 遺跡、中央アメリカ南部 (Lower Central America) のニカラグア太平洋岸のチラマティヨ (Chilamatillo) 遺跡やラ・パス (La Paz) 遺跡等の諸事例の考古学調査の成果を比較研究し、メソアメリカ文明の盛衰に関する通時的データを提供・分析することを目的とする (図1)。

本論はメソアメリカ文明の全容を通史として網羅的に検証するのではない。各事例の調査では、先古典期 (前1000～後200年) と古典期 (後200～950年) の長期間にわたって居住された遺跡を主に選定した。ニカラグア太平洋岸は、国家のような大規模な社会政治組織が形成されなかった事例として比較する。中米の諸事例の通時変化に関連する多種多様な基礎的かつ実証的なデータを互いに検証しながら、比較研究を行うのが本研究の特色といえる [青山他 2014, 2019]。筆者らは、社会を動かす仕組みを提供した公共建築と文字に注目して、その通時的な変化についての共同研究の中間報告を『古代アメリカ』の調査研究速報 [青山他 2017] としてまとめたが、本論はその続編である。

本論の目的は、人口変動、環境変動、戦争、交換、イデオロギー等から、マヤ低地、メキシコ中央高原、メソアメリカ南東部と中央アメリカ南部の事例研究において、複雑社会の起源・形成・衰退のプロセスを実証的に比較検討することである。マヤ文明については、先古典期はセイバル、古典期はエル・パルマルの成果を主に活用して考察する。長期間の社会変化の事例を比較する共同研究の現段階の成果をまとめるとともに、未解決な問題を述べて今後の研究の方向性を明らかにする。

2. 長期間の社会変化の事例研究

2-1. マヤ低地のセイバル

猪俣健 (アリゾナ大学) を団長、ダニエラ・トリアダン (Daniela Triadan: アリゾナ大学)、フローリー・ピンソン (Flory Pinzón: デル・バジェ大学) や青山を共同団長とするセイバル遺跡調査団はマヤ文明の起源と盛衰を解明するために、2005-2017年にグアテマラのセイバル遺跡中心部と周辺部において大規模な層位的発掘調査に挑んだ。その結果、現在のところマヤ低地最古の先古典期中期 (前1000～前350年) 初頭のEグループが出土した [Inomata et al. 2013, 2019]。この太陽の運行に関連した二つの公共祭祀建築は、丘陵の頂上の地盤を平らに削り取った公共広場と東西に面する公共祭祀建築の土製の低い基壇からなった。Eグループを含むセイバル中心部は、大河パシオン川を望む比高100mの丘陵上に建造された。

Eグループの公共広場の東側の「シャアン (Xa'an) 建造物」は、高さが1m、長さが63m、幅16mの低い土製基壇であった。その西50mほどの「アハウ (Ajaw) 建造物」は、高さが2m、底辺が4mの小さな土製基壇であり、正面 (東側) には階段が設けられた。公共広場に面する二つの公共祭祀建築の基壇は、増改築が繰り返された。西側の建造物は、前9世紀から石造の神殿ピラミッドを構成していった。セイバルのEグループは増改築され続け、10世紀まで約2000年にわたって活用された。

猪俣と青山らは、2015年にグアテマラ考古学に航空レーザー測量を初めて導入し、熱帯雨林に覆われたセイバル遺跡全体と周辺地域の地形や遺構を400km²にわたって測量することに成功した [Inomata et al. 2017a, 2018, 2019]。その最も大きな成果の一つが、遺跡中心部の「グループA」でセイバル最大の巨大基壇を確認したことである。それは南北600m、東西340mの長方形であり、高さは15mに及ぶ。この人工の巨大基壇の上にまずEグループが建造され、その後に他の神殿ピラミッドや中小の基壇が建てられたのである。発掘調査によって、巨大基壇の約8割が先古典期に建造・増改築されたことがわかった。その盛り土の総体積は約70万m³を誇る。セイバル遺跡の全ての神殿ピラミッドの体積は、巨大基壇の1割ほどにしか過ぎない。共同体の形成過程にお

いて、初期の公共建築の建設活動は従来考えられていたよりもはるかに盛んであった。

こうした水平性を強調した巨大基壇の源流は、マヤ低地の西隣りに位置するメキシコ湾岸低地南部のオルメカ文明のサン・ロレンソ（San Lorenzo）遺跡（前1400～前1150年）に求められる。サン・ロレンソは川とその支流の氾濫原に囲まれた丘陵上に設けられ、セイバルの立地に類似する。サン・ロレンソでは大規模な労働力を動員して1kmほどにわたり高さ7mに及ぶ大量の盛土で丘陵が人工的に整形されたが、セイバルのような平面が長方形の巨大な基壇は建造されなかった〔Coe and Diehl 1980〕。セイバルの巨大基壇は、オルメカ文明の文化伝統を取捨選択して丘陵上に長方形に建造した先古典期マヤ文明の大公共建築といえよう。

先古典期中期前半（前1000～前700年）の公共広場の供物は、マヤ低地の西のメキシコ湾岸低地南部やチアパス（Chiapas）地方との地域間交換を強く示唆する緑色磨製石斧が主流であった。特筆すべき供物としては、先古典期中期のメソアメリカで権力者が装着したオルメカ美術様式の翡翠製胸飾りも出土した（図2）。先古典期中期後半（前700～前350年）には、マヤ低地の他の中心地との密接な交流を示す土器が埋納されるようになっていった。同時に公共広場に支配層の墓や生け贄墓が造られた〔Inomata 2014〕。支配層も含めた共同体における異なった集団のせめぎ合いの中で、型にはまった同じ公共祭祀が繰り返されたのではなく新しい実践も生み出された。たとえば、高度な製作技術が窺われる完形の黒曜石製石刃残核、海産貝製装飾品や翡翠製装飾品などの象徴・儀礼的に重要な供物を公共広場に十字状に埋納して、マヤの小宇宙を象徴する場合もあった〔Aoyama et al. 2017a: Figures 6, 10〕。

先古典期中期前半は主にエル・チャヤル（El Chayal）産黒曜石がセイバルに搬入された。セイバルの住民は、先古典期中期前半のレアル（Real）1期（前1000～前850年）にグアテマラ高地エル・チャヤル産黒曜石を自然石または自然面を残した大きな石片として搬入して不定形な剥片を打撃剥離した。レアル2期（前850～前775年）の黒曜石製石器の産地ではエル・チャヤルが大部分を占め、サン・マルティン・ヒロテペケ（San Martín Jilotepeque）が続いた。石刃が完成品として搬入されると同時に、黒曜石は自然石または自然面を残した大きな石片としても搬入され、不定形な剥片が打撃剥離された。先古典期中期前半のレアル3期（前775～前700年）



図2 セイバル遺跡のEグループの公共広場に埋納された先古典期中期の「供物171」

に、エル・チャヤル産とサン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石製石刃核の地域間交換と押圧石刃の生産が開始された。レアル3期の大部分の黒曜石はエル・チャヤルから搬入され、サン・マルティン・ヒロテペケ、イシュテペケ（Ixtepeque）が続いた〔Aoyama 2017a〕。

先古典期中期後半には、黒曜石の搬入量が飛躍的に増大した。サン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石が主流になり、エル・チャヤル産が減少し、少量のイシュテペケ産黒曜石も搬入された。グアテマラ高地とマヤ低地を結ぶ地域間交換網に大きな変化があったことがわかる。先古典期中期前半のレアル3期から先古典期終末期にかけて時代が下るにつれて、大型の石刃核の搬入が増加したが、黒曜石は先古典期を通して自然石または自然面を残した大きな石片としても搬入され、石刃や剥片が

製作された。古典期前期（200～600 年）には、黒曜石の産地では先古典期中期前半と同様にエル・チャヤルが再び主流になった。イシュテペケが増え、サン・マルティン・ヒロテペケが激減した。グアテマラ高地とマヤ低地を結ぶ地域間交換網に再び大きな変化があった。大部分の黒曜石は古典期にエル・チャヤルから搬入され、石刃を押圧剥離するために既に整形された、より小さな石刃核として搬入されるようになった。

少量のメキシコ高地産黒曜石が、古典期に完成品の石刃や両面調整尖頭器としてセイバルに遠距離交換された。メキシコ産黒曜石製石器は、古典期を通してセイバル遺跡中心部の公共建築や公共広場だけで見つかり、周辺部では全く出土していない。つまりメキシコ高地産黒曜石製石器は経済的な価値をもつ実用品というよりもむしろ、支配層が権威を示す威信財として社会・象徴的に重要であった。対照的にグアテマラ高地から地域間交換された黒曜石製石器はセイバル遺跡中心部だけでなく周辺部にも流通し、全ての社会階層の日常の道具として使われた。換言すると、グアテマラ高地産黒曜石の地域間交換は、セイバルの複雑社会の形成・発展においてメキシコ高地産黒曜石の遠距離交換よりも経済的に重要な役割を果たしたのである。

土器編年の細分化及びマヤ考古学では例外的に豊富な 182 点の試料の放射性炭素年代を組み合わせ、セイバル遺跡の高精度編年を確立した [Inomata et al. 2017b, 2019]。戦争の証拠は、武器として使用されたと考えられる黒曜石・チャート製尖頭器、殺傷痕のある成人の生贄墓 [Palomo et al. 2017] や海産貝ウミギクガイに生首を彫刻した胸飾り [Inomata et al. 2017c:Figure 6] など先古典期中期から存在する。セイバルの都市は、戦争の激化によって社会が不安定になり、300 年頃と 900 年頃に人口が激減して衰退した。1 回目の衰退期には、他の王朝の影響あるいは内政干渉によってセイバル王朝が成立した。2 回目の衰退期にセイバル王朝が漸絶し、人口が減少し続けて 10 世紀に都市が放棄された。

セイバル遺跡の堆積物試料からフローテーション（水洗浮遊選別）法により炭化した植物の種子や木片を収集・分析した。古典期後期のセイバルでは都市化による人口増加と農地の拡大に伴って熱帯雨林を構成したクワ科やサポジラ科の広葉樹の樹木が伐採されて減少し環境破壊が進行した。その代わりに、乾燥や荒地に強く、成長が早いマツが多く生育するようになった [那須他 2019:42-43]。ちなみに現在のセイバルでは、マツは生えていない。碑文の解説 [Martin and Grube 2008] や考古学的な状況証拠によれば、古典期後期（後 600～810 年）と古典期終末期（後 810～950 年）に戦争が激化した。セイバル中心部でチャート製石槍の製作と使用が増した [Aoyama 2017b]。大部分の石槍がセイバル中心部の公共建築、支配層住居や公共広場から出土しており、支配層が戦争に深く関わったことがわかる。マヤ文明の王や支配層の戦士としての役割が古典期後期・終末期により重要になったといえよう。王宮やE グループの神殿ピラミッドでは、10 世紀末に破壊儀礼が執行された [Houston and Inomata 2009:309]。セイバル王朝衰退の要因の一つが戦争の激化であった。

2-2. マヤ低地のエル・パルマール

塚本とハビエル・ロペス・カマチョ（Javier López Camacho: メキシコ国立人類学・歴史学大学）を共同団長とするエル・パルマール考古学プロジェクトは、古典期マヤ社会における都市化のプロセスを解明することを目的として、カンペチェ州南東部に位置するエル・パルマール遺跡において調査を実施している。本調査では、マヤ社会政治組織に着目した。マヤ文字解読の飛躍的な進歩によって、古典期における王朝史の詳細とその複雑な政治構造が明らかになりつつある。特に古典期後期に入ると、称号を有する非王族エリート集団（以下、エリート集団）が石造記念碑や彩色土器などに描かれるのみならず、碑文の中で個人名や称号と共に言及されるようになる [Jackson 2013]。彼らは、儀礼、戦争、同盟、貢納などの様々な政治、文化、経済的場面に登場するため、マヤ王朝の社会政治組織において重要な役割を担っていたと考えられている [Houston and Stuart 2001]。

ところが、古典期マヤ社会における彼らの社会政治的役割と物質文化を理解する際に、先行研究は二つの大きな問題に直面してきた。第一に、コパン (Copán) [Webster et al. 1998] などの一部の遺跡を除き、これまで発見された碑文は、発見場所とエリート集団の居住地との関連性が希薄であった。さらに碑文の内容は主にエリート集団ではなく、王や王族について記されたものであり、周縁部に住むエリート集団の日常生活や物質文化については不明であった。第二に、例外的に碑文が刻まれた石碑の場所がエリート集団の居住地と一致した場合でも、考古遺物から推測された物質文化や社会変化の編年と碑文の年代記の精度には大きな隔たりがあったために、その関連性が曖昧であった。

本調査では、この二つの問題を乗り越えつつ、古典期のマヤ王朝史における都市周縁部に住むエリート集団の社会政治的役割をより深く理解することを目的とした。第一の問題を解決するために、エル・パルマル中心部から 1.3km 北に位置するグスマン・グループ (Guzmán Group) に着目した。この周縁建造物グループは、エリート集団によって神殿の階段に刻まれた碑文を有するマヤ低地において例外的な建造物群である [塚本 2016]。さらに神殿のある広場周辺には、彼らの居住や様々な諸活動を支えた建造物が立ち並んでいる。第二の問題については、広大な面積を有した古代都市エル・パルマル全体ではなく、グスマン・グループから出土した 78 点の炭素試料に層位と土器編年、碑文解読の成果を組み合わせたベイズ統計によって高精度編年を確立し、マヤ王朝史全体とグスマン・グループの社会的変化の詳細な関係性を明らかにした。

調査成果から、グスマン・グループは後 210~350 年までに居住が開始されたことが明らかとなった。マヤ低地南部では、後 378 年以降にテオティワカンとティカル (Tikal) に関連した大きな社会変化が起こる [Martin and Grube 2008]。例えば、エル・パルマルから 34km 南に位置するリオ・アスル (Río Azul) では、後 393 年にテオティワカン出身と考えられるシヤフ・カフク (Siyaj K'ahk') によって地元の支配者たちが捕らわれ、新たな王朝が築かれた [Adams 1999]。エル・パルマルから 50km 北に位置するベカン (Becan) においても、後 450~630 年頃に周縁部の広場が次々と放棄され、代わりに単独の神殿が設けられた [Thomas 1981:99-100]。ベカンの中心部からは、テオティワカン様式の土製品も出土している。

エル・パルマルも例外ではなく、古典期中期 (後 400~600 年頃) において中心部の都市化が急激に進んだことがわかっている [塚本 2017]。しかし本研究によって古典期中期をさらに細分化した結果、グスマン・グループにおいては、ティカル・テオティワカンの政治勢力がマヤ低地南部に拡大する後 378 年から、ティカルがマヤ最大の蛇王朝に敗北する後 562 年までの間に急激な変化は見られなかった。この頃のグスマン・グループには広場すら存在せず、貯蔵穴を有する簡素な木造住居が点在していた。つまり、エル・パルマル都市中心部と周縁部では、都市化のプロセスが異なっていたのである。

グスマン・グループの社会変化は、蛇王朝のマヤ低地南部への拡大と関係している。蛇王朝は後 635 年までマヤ低地北部と南部の境目に位置するツィバンチェ (Dzibanché) に首都を定めていたが、6 世紀頃からマヤ低地南部にある王朝への政治的介入を始める。カンパチェ州南東部においては、後 561 年にエル・パルマルから 18km 南東に位置するロス・アラクラネス (Los Alacranes) 王朝において、蛇王朝の「空を見る者」王がロス・アラクラネス王の即位式に介入したことがわかっている [Grube 2008]。「空を見る者」王は、エル・パルマルから 150km 南に位置するカラクムル (Calakmul) にも勢力を広げ、遂には後 562 年にティカル王朝を打ち負かした。グスマン・グループでは後 561~639 年に、後に碑文階段が設置される神殿 GZ1 のある広場の東側に初めて建物が設けられた。しかしこの建物が神殿であったかどうかは現在のところ不明である。広場の南にある建造物 GZ3 にも前時代の建物が設けられたが、広場を形成するには至らなかった。実際のところ、広場中央部のやや北側には貯蔵穴を有する基壇が存在していた。

後 635 年になると、蛇王朝は首都をエル・パルマールの西 50km に位置するカラクムルへ遷都する [Helmke and Awe 2016]。そして、その 1 年後の 636 年にユクノーム・チェーン (Yuknoom Ch'e'n) 二世が蛇王朝の王位に就き、後 686 年まで古典期のマヤ低地において最も影響を及ぼした。その治世下の後 650~671 年には、グスマン広場の北側と西側に建造物が建設された。しかし、北側の建造物 GZ6 の部屋内部にある石造のベンチは、この頃には存在していない。また、西側に建てられた建造物 GZ5-Sub1 は、後の時代の建物に比べて小規模であった。グスマン広場が政治舞台へと変化したのは、後 695 年にティカルに敗北した蛇王朝が、ユクノーム・トーク・カウィール (Yuknoom Took' K'awiil) 王の治世下により、再びその勢力を回復させる後 702 年以降である。グスマン広場に設置された階段には、蛇王朝の政治戦略に関わっていたラカム (Lakam: マヤ・ユカテカ語で旗の意味) の称号を持つエリート集団に関する碑文が刻まれている [Tsukamoto and Esparza Olguín 2015; Tsukamoto et al. 2015]。

碑文によると、歴代のエル・パルマール王に仕えたラカムは、少なくとも四世代前まで遡る。そして、その末裔であるアフパチ・ワール (Ajpač' Waal) は、後 726 年にマヤ低地南東部に位置するコパン王朝の 13 代目王に謁見した。アフパチ・ワールの父が仕えたエル・パルマールのウパカル・キニッチ (Upakal K'inich) 王の名前は、エル・パルマールの中心部にある石碑 10 に刻まれているだけではなく、エル・パルマールとコパンの間にあるナフ・トゥニッチ (Naj Tunich) 洞窟にも描かれている。石碑 10 と洞窟の碑文は、後 711 年と 719 年に記された。これらの記述に加えて、蛇王朝のユクノーム・トーク・カウィール王の名がグスマン・グループの碑文階段に刻まれていること

から、エル・パルマール王とラカム集団は、後 711 年から 726 年にかけてコパン王朝と同盟を試みたと推測される。

グスマン・グループは、後 726 年に政治演説の舞台装置となる碑文階段の神殿 GZ1 が設けられただけでなく [Tsukamoto 2014]、建造物 GZ3、GZ5、GZ6 の建設によって広場が形成された (図 3)。同時に、広場内に設けられていた前時代の建物は取り壊された。建造物 GZ6 の西側の部屋には、来訪者を謁見するための石造ベンチが新たに設置された。またこの建物の中央部には、貢ぎ物などを一時的に保管できる小さな部屋が追加された。神殿 GZ1 の向かいにある建造物 GZ5 は、広場側に五つの入り口を有する全長 25m の公共建造物へと変化した。この時期以降にグスマン・グループで出土した土器には、墓の供物を含めて直径が 30cm 以上、中には 70cm に達する大椀や大皿が含まれており、政治的儀礼などの際に繰り返し饗宴が行われていたと推測される [Tsukamoto 2017]。



図 3 エル・パルマール遺跡のグスマン広場

蛇王朝がティカルに二度目の敗北を喫した後 734 もしくは 735 年以降に [Beliaev et al. 2013:129-132]、グスマン広場において大規模な増改築が行われることはなかった。ただし、広場外はこれまで限定的にしか発掘されていないため、建築事業が広場内から外へと拡大した可能性は否めない。マヤ低地南部にある他のマヤ遺跡群と同様に、グスマン・グループは後 800~850 年頃に放棄された。

これらを総合すると、グスマン・グループのラカム集団は、蛇王朝のカンペチェ州南東部への進出に伴って、エル・パルマール王朝内での政治的立場を確立し、蛇王朝の政治戦略に主体的な役割を果たしたようである。同時に王朝内における立場を維持するために、政治的儀礼や饗宴を繰り返し行った。そして蛇王朝の崩壊後もグスマン・グループでの居住は続いたが、広場における大規模な建設事業は実施されなかった。

2-3. メキシコ中央高原のトラランカレカ

村上達也 (テュレーン大学) と嘉幡を共同団長とするトラランカレカ考古学プロジェクトは、メキシコ中央高原における先古典期から古典期にかけての社会的特徴やその変化を解明する目的で、2012年から実施されている [e.g., 嘉幡2019:61-74; 嘉幡・村上2015; 嘉幡他2014, 2017; Kabata et al. 2014; Murakami et al. 2017, 2018]。2019年8月までに行った調査の結果から、トラランカレカ遺跡 (前800~後300年) における都市化の発展過程をおおよそ復元することができ、衰退に関する仮説の提示が可能となった。同時に、先行研究との比較考察によって、テオティワカン (前150~後550/600年) での国家形成や Cholula (前200~後600年) での大都市の台頭を代表例とする古典期社会への移行について議論できる段階に入った。

本節の目的は、まず上記の研究成果をまとめてトラランカレカの都市形成史を概観することにある。次に、社会の発展は一般的に組織の強化そして知識の蓄積や技術の進歩によると説明可能ではあるが、本論ではここから議論をさらに進め、原動力には社会的結束力を高めた観念体系の共有化や再解釈があったことを指摘する。最後に、この古代都市の衰退には、ポポカテペトル (Popocatepetl) 火山の噴火 (後70年頃) を代表例とする自然

要因によって引き起こされた、パラダイム・シフトが大きく影響していたと主張する。

トラランカレカ遺跡は、メキシコ盆地とエブラ・トラスカラ地域の間にそびえるシエラ・マドレ山脈の一角をなすイスタシワトル (Iztaccihuatl) 山 (標高 5230m) の北東の麓に位置している。遺跡の中心部はこの麓にある舌状台地に位置し、居住範囲はその北区域と南区域にも広がっていた (図4)。トラテンバ期 (Tlatempa; 前800~前650年; トラランカレカI期) に定住村落が確立した。表面採集調査の結果に基づく、土器は舌状台地の東側及び北区域で集中して出土しており、いくつかの住居集団が散在していたと推測できる。次のテショロック期 (Texoloc; 前650~前500年; トラランカレカII期) では、舌状台地の東側、北区域の南部、そして南区域の

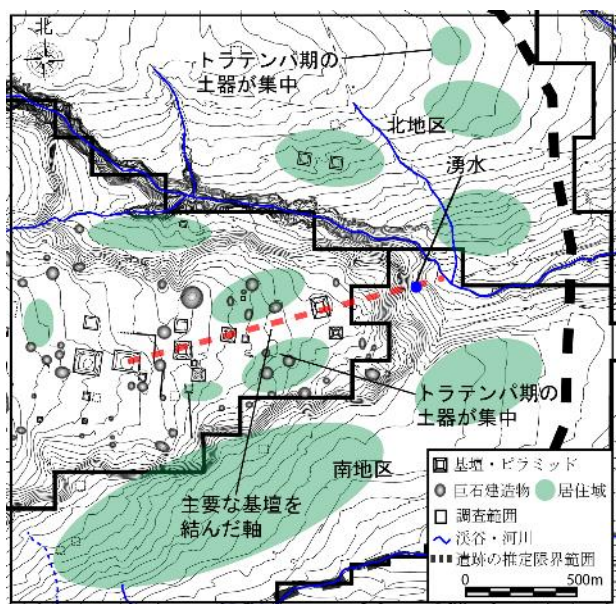


図4 トラランカレカ I~III 期の空間組織

北部に居住の痕跡を示す遺物が集中している。ここから判断して、居住域は丘陵部の東端の崖下に位置する自然の泉（図4の湧水）を中心に形成されていたと考えられる。

一方で居住域は、峡谷や崖などの自然地形によって分断されており一カ所にはまとまっていなかった。ある程度自立した近隣住区を形成していたと考えられる。他方、祭祀・行政用の建造物は丘陵部東部に集中していた。これらの建造物群の配置には、後のテオティワカンでは一般的となる対称性や中心軸といった明らかなパターンは認められない。しかし主要な基壇を直線で結ぶと、その延長線上に崖下の湧水が位置している。泉は異なる社会集団を相互交流させる中心的な場であった可能性を示唆できる（「水の山」の形成）。この時期以降、トラランカレカは政治的・宗教的な中心地として発展していく基盤が整ったと考えられる。

テソキパン期（Tezoquipan; 前500～後50/100年）の前半（トラランカレカⅢ期）から、社会はさらに発展し都市が形成されていったと考えられる。居住密集地は舌状台地の西に向かって拡大し、巨大な都市へと変貌した（図5）。この時期に祭祀・行政用建造物の中心軸が確立され、数々の巨大建造物が造られた。ショチテカトル（Xochitécatl）、ラ・ラグーナ（La Laguna）、クイクイルコ（Cuicuilco）など同時代に存在していた都市・大集落では、大規模建築複合はピラミッドと大広場で構成され、一つの「中心部」を有することが一般的であった。しかし、トラランカレカにおける空間組織は、九カ所において「中心部」が造られたため、大きく異なる。

テソキパン期の後半及びテナンイエカック期初期（Tenanyecac; 後50/100～200年；トラランカレカⅣ期）にかけ、Ⅲ期に形成された建築複合の各建造物に増改築が繰り返されたことがわかった。後70年頃にポポカテペトル火山が噴火し、ショチテカトルやクイクイルコが衰退する一方で、トラランカレカはこの自然災害をバネとして最盛期を迎える。特にこの遺跡の最大規模を持つセロ・グランデ建築複合での増改築は、他の建築複合と比較して顕著であった。また、セロ・グランデ・ピラミッドの壁面には、後にテオティワカン国家で標準化した

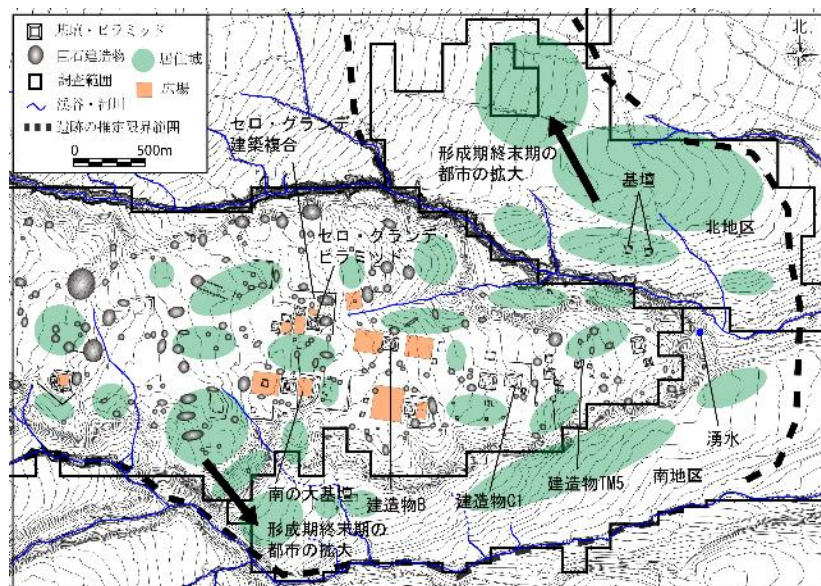


図5 トランカレカⅣ期の空間組織

建築様式（タルー・タブレロ様式）が採用されていたことが判明した。後200～300年（古典前期の初期；トラランカレカⅤ期）は、トラランカレカ社会の衰退期である。この時期には前時期に見られた増改築は認められず、新たな建築複合が形成されることもなかった。

トラランカレカ社会の空間利用の変遷からいくつかの興味深い特徴が理解できる。まず、

この社会は舌状台地の東側を中心（図4の湧水）に集落が形成され、時とともに西側に広がったことである。しかし、この広がりは隣接していた非居住域が徐々に開発されていった結果、連続した空間として西にじわじわと拡大していくパターンではなかった。トラランカレカⅡ期で認められた居住域が複数カ所存在する空間パ

ターンを踏襲して、Ⅲ期には舌状台地で複数の建築複合（「中心部」）が誕生した。つまり、この時期までのトラランカレカ社会は、一つの強固な集団へとまとまっていく社会統合の歩みを取らず、各建築複合の集団が各自の「中心部」を形成し、緩やかな集合体として発展していった。しかし、この共同体の構造はトラランカレカⅣ期に変質する。各建築複合において増改築は認められるものの、セロ・グランデ建築複合でより顕著であるため、ここを都市の最重要拠点（「中心部」）として社会がまとまっていくからである〔嘉幡 2019:66-69〕。

トラランカレカ社会の盛衰には、観念体系の確立と共有化、再解釈、そしてパラダイム・シフトが関連しており、三つの変革期が認められる。①トラランカレカⅠ～Ⅲ期：湧水を中心に複数の社会集団が形成され、これが発展・拡大していく段階（観念体系の確立と共有化）、②トラランカレカⅣ期：ポポカテペトル火山の噴火によって今までの観念体系を見直す必要に迫られた時期（観念体系の再解釈）、③トラランカレカⅤ期：この観念体系が受け入れられなくなり衰退する時期（パラダイム・シフト）。嘉幡や村上は、ある特定地域における社会の発展が、組織の強化そして知識や技術の進歩のみを起因とするのではなく、観念体系の変化も含めて考察すべきだと考える。その理由は、ある特定地域に人々が密集する原動力には、社会の統合を可能にする観念体系の確立と共有化が必要であり、古代の都市とは物質空間である前に象徴空間（アルテペトル；ナワトル語で「水の山」）であったと考えるからである〔嘉幡他 2017:75-77〕。

トラランカレカⅠ～Ⅲ期にかけて、湧水をシンボルとして自然地形を利用し「水の山」が創り出された。トラランカレカの都市空間が、平野部の広がる東に向かわず西にある舌状台地に拡大したのは、70～100mほど高い舌状台地が「水の山」としてシンボル化されたからと推測できる。トラランカレカⅣ期は、ポポカテペトル火山の噴火によって、メキシコ盆地やプエブラ・トラスカラ地域一帯に社会変動が引き起こされ、被災者が新たな定住先としてトラランカレカ、テオティワカンそして Cholula などに大挙押し寄せた動乱期である。この状況下において、トラランカレカ社会は、成員間の結束をより強固にする目的で、セロ・グランデ建築複合を最大の「水の山（中心部）」として社会組織の再編を実施したと考えられる。

しかし、このポポカテペトル火山噴火を契機とする社会組織の再編は、トラランカレカのみで起こったのではなく、テオティワカンでも Cholula でも実施されていた。後二者が後 300 年以降も発展し続けたのに対し、トラランカレカは衰退する。これは、トラランカレカの為政者らが社会混乱によってパラダイムが変化する中、これを克服するためのイノベーション能力（観念体系の見直しとその共有化）の面において、テオティワカンと Cholula に劣っていたためであると考えられる〔嘉幡 2019:68-74〕。

2.4. メキシコ中央高原のテオティワカン

福原はテオティワカンにおける初期国家形成過程を解明するため、一般庶民が居住したテオティワカンの住居址を調査した。メキシコ中央高原の他の遺跡に比べて、テオティワカン遺跡では公共建築のみでなく都市全域での調査研究が進んでいる。しかし都市中心部の公共建築に比べると、一般住居に対する調査は質、量ともに限定されている。社会の複雑化を考える際、トップダウンの視点だけでは見落とされてしまう社会変化を一般住居址資料から拾い上げ、都市中心部の資料と比較検討することが必要である〔福原 2017:86〕。また社会の複雑化を理解するためにはテオティワカン自体の研究のみでは十分でなく、広域の社会状況と時間的前後関係に注意を払う必要がある〔嘉幡 2019〕。この観点から、テオティワカン成立以前の居住形態を理解するため、トラランカレカ遺跡の住居址においても調査を実施した。火山噴火の影響範囲と規模を調べるために踏査とコアリング調査も実施した。初期国家形成直前にメキシコ中央高原に大規模な災害と人口移動をもたらしたポポカテペトル火山噴火は、メキシコ中央高原全体に社会変化を引き起こす大きな出来事であった。

これらの調査のうち、本節ではテオティワカン遺跡のアパート式住居複合に焦点を当て、その変遷過程をテオティワカン史の中に位置づけて、社会の複雑化がどのように起きたのかを考察する。調査を実施したテオティワカンのラ・ベンティージャ (La Ventilla) 地区は隣接する複数のアパート式住居複合が20年以上にわたり継続的に発掘調査されている唯一の地区であり、調査資料が蓄積されている。ラ・ベンティージャ地区のラ・ベンティージャ I は地区を統括する地区神殿の役割を果たし、ラ・ベンティージャ II はエリート住居址、ラ・ベンティージャ III は手工芸品生産を担った庶民の住居址であった [Gómez Chávez 2000]。

アパート式住居複合は、各々の大きさや材質に差異があるものの、その空間デザインは規格化され均質性が高い。周囲を高く厚い壁で囲い、内部に複数の中庭を配し、その中庭を囲うように部屋や基壇が配置される。中庭と部屋または中庭と基壇というセットが一つの単位(以下ユニット)となっており、これらユニットが複合し一つのアパート式住居複合を構成する。一つのアパート式住居複合は血縁者や地縁

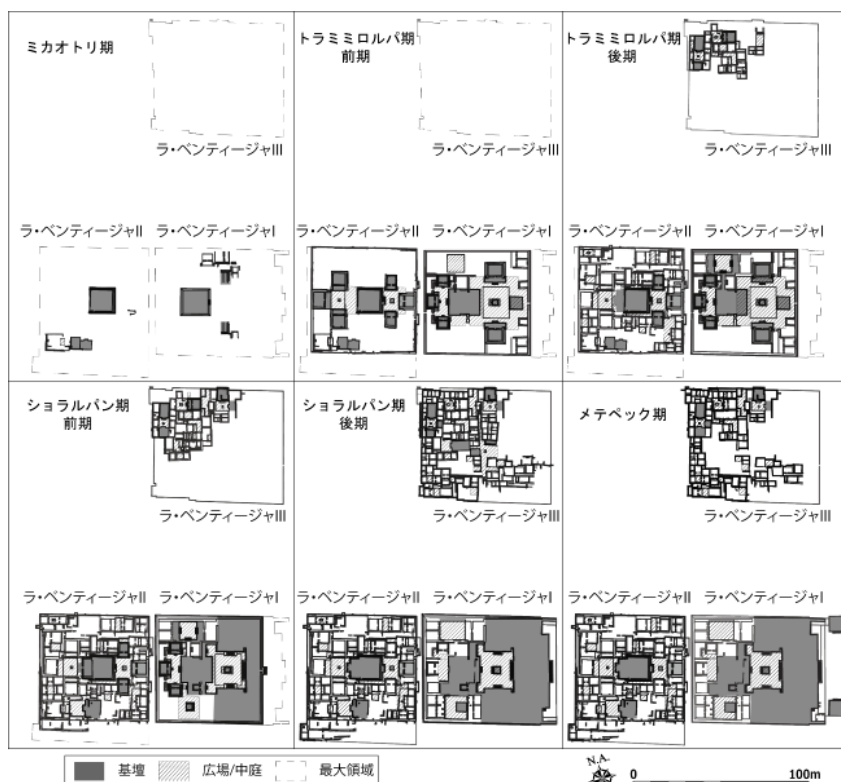


図6 ラ・ベンティージャ地区、アパート式住居複合の建築変遷過程

者、専門工房などの社会的つながりを持つ複数の世帯によって共有された [Millon et al. 1973: 40]。中庭と基壇で構成されたユニットは、アパート式住居複合を共有する集団の祭祀・政治集会に利用され、集団生活の紐帯を深める役割を果たした [福原 2017]。

アパート式住居複合はトラミミロルパ期 (Tlamimilolpa: 後 200~350 年) に建設が開始された [Millon 1981: 206]。規格的な空間デザインもこの時期には既に基本形式として確立されていた。ショラルパン前期 (Xolalpan: 後 350~450 年) 以降は大型公共建築の建設や改築がほぼ停止し、代わってアパート式住居複合の建設が活発になりテオティワカンの崩壊期まで継続された。

ラ・ベンティージャ地区の発掘調査報告によれば、最初の建設活動はミカオトリ期 (Miccaotli: 後 150~200 年) にさかのぼる [Cabrera Castro 2003]。測量調査を基に行ったアパート式住居複合の復元 (図6) によれば、後のラ・ベンティージャ I および II の基礎となる 1 辺の長さが 15m を超える中心基壇がミカオトリ期に建設され

た。基壇はタルー装飾(斜壁)が施され、アパート式住居複合を区画する外周壁はまだない。その後、トラミミロルパ期前期(後200~250年)にラ・ベンティージャⅠおよびⅡで1辺の長さ約60mの外周壁が造られる。内部にはタルー・タブレロ装飾(斜壁と垂直飾り壁)をもつ基壇の複合体と中庭のセットが建設された。トラミミロルパ期後期(後250~350年)にラ・ベンティージャⅢも建設が開始され、ラ・ベンティージャⅡとⅢでは部屋状構造が増加し居住空間としての役割も担うようになる。

ラ・ベンティージャⅡの中庭は分割または縮小され、中庭と基壇を中心とした儀礼や政治的空間の中心はラ・ベンティージャⅠへと収斂していく。ショラルパン期前期(後350~450年)にラ・ベンティージャⅠでは基壇が拡大し、それ以前は中庭を通して可能であった内部空間へのアクセスが制限され、中庭も縮小された。ショラルパン期後期(後450~550年)にはラ・ベンティージャⅠの外周壁が東へ拡張し、タルー・タブレロ装飾が施され、大きな基壇のような外装になる。以前は儀礼や政治活動を行う公的機能がラ・ベンティージャⅠの内部空間に収まっていたが、その一部がラ・ベンティージャⅠの東側の外部空間へと移っていく。また、ラ・ベンティージャⅡではアパート式住居複合の南側への拡張が進んだ。メテペック期(Metepec: 後550~650年)にはラ・ベンティージャⅠの東側隣接部が開発され、南北に小基壇を備える広場が整備された。

次にテオティワカンの歴史にアパート式住居複合の変遷過程を位置づける。テオティワカンではミカオトリ期からトラミミロルパ期前期にかけて都市建設が進み、国家が誕生した。後のアパート式住居複合の礎となる基壇はミカオトリ期に建設が開始されており[Cabrera Castro 2003:23]、国家的統合を図る都市中心部の大型公共建築のみでなく、居住区においても小型基壇を中心に小さな共同体の紐帯を深めるべく試みられていたと指摘できる。

その後、羽毛の蛇神殿や太陽のピラミッドが建設されたトラミミロルパ期前期に、アパート式住居複合が誕生した。都市中心部の建設活動と同時に、一般庶民に対しても居住区が割り当てられたといえる。トラミミロルパ期後期には、アパート式住居複合の内部に住環境が整備されていく。都市中心部で公共建築がさらに大型化しトップダウンでの国民統合が進むのに呼応する形で、アパート式住居複合では、世帯毎や工房毎に構成員を統合する小規模な基壇と中庭のセットが造られた。基壇や中庭での共同活動を通して、複雑化する社会の統合や維持が図られたと考えられる。

しかし、都市中心部の建設ラッシュが落ち着くショラルパン期になると、中庭は新たな部屋の建設や基壇の拡大により縮小または分割された。特にこの傾向は地区神殿で顕著に見られ、基壇部分がアパート式住居複合の半分以上を占めるような拡張が行われた。社会統合の方法は中庭での活動から秘匿性の高い基壇上部での活動へシフトしたのかもしれない。ただし、ラ・ベンティージャⅠの東側がショラルパン期後期からメテペック期にかけて広場として利用されるようになることから、ラ・ベンティージャⅠの地区神殿がより多くの成員に対する社会統合の場所として改築されたと見ることもできる。ショラルパン期後期からメテペック期にかけての時期は、テオティワカン国家が衰退していく時期にあたり、社会も不安定化したと考えられる。社会不安の高まりとともに、地区レベルの社会統合の仕組みがより大規模化したともいえるだろう。ただし、この時期は既存の支配者に代わる新たなエリートが台頭する時期でもあり、イデオロギーの変化がアパート式住居複合の変化に表れているともいえる。

基壇と中庭の組合せは継続的に使用され続けるものの、アパート式住居複合の建設初期には小規模な共同体に分かれていた住人を国家へ統合するための装置として活用された。やがて共同体同士の紐帯が強化されると、国民統合の役割は地区神殿が中心的に担うようになる。国家衰退期にも地区神殿は大きな役割を果たしたと考えられるが、新たなイデオロギーの下でその役割に変化が起きたと考えられる。

2-5. メソアメリカ南東部のチャルチュアパとサン・アンドレス

市川は、メキシコ中央高原やマヤ低地のように大都市が栄えた地域の社会変化との比較を射程として、メソアメリカ文明圏の南東周縁部に位置するチャルチュアパ遺跡とサン・アンドレス遺跡の調査を実施した。文明形成の核となる大都市や支配層だけでなく、大都市の周辺に位置する多数のセンターや集落、一般民衆への関心は高まっている。これまで受動的・静的と見なされてきた存在を能動的・動的な存在として位置づけ、多様な社会集団の相互作用の結果として複雑社会の動態を解明する必要がある [e.g. Joyce et al. 2016]。メソアメリカ文明の大都市が興亡する中で、その周縁の社会ではどのような変化があるのか、または変化しないのか、周縁地域内での社会動態にも着目しながら検討する。

メソアメリカ南東周縁部における複雑社会の形成過程の解明にむけて、カミナルフユ (Kaminaljuyú) やコパンといった大都市遺跡の南東に位置するチャルチュアパ遺跡とサン・アンドレス遺跡を調査の対象とした。いずれの遺跡も少なくとも先古典期中期 (前 1000～前 350 年) から後古典期後期 (1250 年～16 世紀) までの長期の社会活動が営まれていたため、通時的研究に適しているからである [市川・八木 2016; Sharer 1978]。またいずれの遺跡も火山噴火の影響を受けており、突発的な環境変化と複雑社会の動態に関する知見が期待できることは、メキシコ中央高原の複雑社会の形成過程との比較においても有益なデータを提供できる。本論では、ペンシルバニア大学などの調査成果に加えて、名古屋大学が中心となって実施してきた調査成果を基に、メソアメリカ南東部の社会変化を見ていく。通時的变化の把握には、チャルチュアパ遺跡では 51 点、サン・アンドレス遺跡では 25 点の放射性炭素年代と土器編年を組み合わせることで精度の向上を図った。

チャルチュアパでは先古典期前期 (前 1200 年頃) から人々の居住が始まり、先古典期中期前半に相当する前 900～650 年には高さ約 22m に達する土製ピラミッド (E3-1-2nd 建造物) が自然地形を利用したと考えられる基壇の上に建造される。E3-1-2nd 建造物は、高さという点において、メキシコ湾岸低地南部のラ・ベンタ (La Venta)



図7 チャルチュアパ遺跡カサ・ブランカ地区
出土の石碑祭壇複合

遺跡の建造物 C-1 の約 34m、グアテマラ太平洋岸低地のラ・ブランカ (La Blanca) 遺跡の 1 号マウンドの約 25m には及ばないものの、先古典期中期のメソアメリカの中でも大型の部類に属することは間違いない。ただし、このような大型の公共建築がチャルチュアパで誕生した背景を知る手がかりは現段階では少ない。オルメカ的な顔つきの有力者の到来を想起させる 12 号石彫が見つかり、オルメカ文明との接触や聖なる山信仰がチャルチュアパ興隆のきっかけとなった可能性はある。一方、肥沃な土壌で知られるサポティタン (Zapotitán) 盆地に位置するサン・アンドレスでは、前 600 年頃から土器生産が活発化するようであるが、公共建造物などではなく社会の複雑化はそれほど進行していなかった。

先古典期後期・終末期に相当する前 200 年頃～後 200 年頃にかけて、チャルチュアパでは新たに更新された E3-1-1st 建造物を中心として、その周囲には複数の公共建築および公共広場が建設された。E3-1-1st 建造物は、

高さ約 24m にまで達した（先スペイン期エルサルバドル最大）。公共建築の正面には文字や暦が刻まれた石彫や素面の石碑祭壇複合などが建立された（図 7）。公共建築群の三角形配置、南北の中心軸線上に石彫や供物が配置されるなど景観に規則性が認められる。公共建築群の周囲にはトモロコシ畑が巡らされており、往時の社会生活を成立させる上で重要であった観念体系や世界観が確立されていたと推測する。こうした観念体系や世界観をはじめ多様な文化要素を、チャルチュアパの人々は、同時期のカミナルフユ、タカリク・アバフ（Tak'alik Ab'aj）、イサパ（Izapa）といった主要センターと共有した。

近年チャルチュアパで発見された長期暦の 7 バクトゥンの日付をもつ石碑破片などの存在に鑑みれば [Ito and Stuart 2019]、同時期の社会の中でも先進的な知識や技術を有していたと考えられる。同時に、通称「様式化されたジャガーヘッド」と呼ばれる地域独自の様式の創造、装飾性に優れたウスルタン（Usulután）様式土器やグアテマラ高地のイシュテペケ産黒曜石の生産と流通経路を確保し、地域に根ざした世界観や経済基盤を構築していった。サボティタン盆地では、チャルチュアパと同様な建造物配置をもつエル・カンビオ（El Cambio）が主要センターとして発展するが、石彫が製作されることはなかった。土器ではウスルタン様式土器が占める割合は低く、粗雑な刻線文が特徴的な在地系土器が生産されていた。サン・アンドレスでは畝を使用した農耕を営みながら大量の土器を生産していたが、公共建築群はまだ建造されていない。

先古典期後期から終末期に相当する前 400～後 150 年にかけてのマヤ南部地域は、マヤ社会の複雑化の過程を考える上で重要な時期として議論が活発になってきている。とりわけ猪俣らによる新カミナルフユ編年案が議論の呼び水となっている [Inomata et al. 2014; Inomata and Henderson 2016]。猪俣らは、1) 前 350 年頃にラ・ベントの凋落と同調するようにマヤ南部地域の諸センターが衰退する、2) 豊富な副葬品を持つ厚葬墓の存在や石彫様式から推測される王を頂点とする中央集権的な社会の形成が前 100 年以降に急速に進むと主張する。否定的な見解もないわけではない [Love 2018; Rosenswig 2019]。しかし、チャルチュアパの既存データからは否定できる物証は現時点では見当たらない。猪俣らの説が正しいならば、チャルチュアパの社会変化も前 100 年以降に急速に進んだといえよう。ただしチャルチュアパでは厚葬墓は存在せず、後代のように権威や権力を墓に表象することはなかったといえる。



図 8 サン・アンドレス遺跡 5 号建造物
に使われた大量の白色火山灰

後 150～200 年頃には、カミナルフユやエル・ミラドル（El Mirador）などの大センターが次々と衰退する。チャルチュアパでも大きな変化が生じる。公共建築群の場所が遷移するに伴い、建築方位軸で東西軸が基本となり、建築様式も一変した。神殿ピラミッドには外部からは見えないアクセスの限定された閉鎖空間の創出、厚葬墓も造られる。閉鎖空間の創出や厚葬墓の出現は、前代と比較して成員間の格差が広がり、権力や富を掌握した支配層が出現したことを示唆する。こうした支配者の存在は、後 400～450 年に起きた新大陸最大規模と評されるイロパンゴ火山の巨大噴火後にさらに顕著になる。先行研究で指摘されているような噴火による崩壊・断絶ではなく、むしろ自然災害を契機として社会はさらに複雑化していったと考えられる [市川 2017]。その傍証として、サン・アンドレスでは噴火後に災害因子である火山灰を建築材として神殿ピラミッドなどの公共建築群の建造が開始される（図 8）。

図像資料などに乏しいメソアメリカ南東部ではメキシコ中央高原やマヤ低地に見られるような聖なる山信仰の存在をどこまで敷衍するかは今後の課題である。とはいえ、大量に降り注いだ火山灰によって一面白銀の世界と化した景観の中に身を置いた人々の間で社会の変革を促す機運が高まっていったのかもしれない。特に支配層にとっては混乱を収束し、社会を再生する手腕が問われたことであろう。

古典期のマヤ低地では碑文に王朝の歴史が刻まれ、神聖王として個人を表象する傾向が強化される。しかし、チャルチュアパやサン・アンドレスの支配層はコパン王朝から下賜品を授与されるなどの交流があったにもかかわらず [Card and Zender 2016:287-289]、歴史や個人を表象する石碑を残すことはなかった。古典期のマヤ低地とメソアメリカ南東部ではある特定の支配層の権力が強化されていくという点において類似しているが、その物質的表象には異なる戦略があったと推測される。メソアメリカ南東部では先古典期に既に石彫を核とした信仰を通じて社会統合戦略が図られていたにもかかわらず、後代に継承されることはなかった。マヤ南部地域でも石彫がほとんど造られなくなることに鑑みるならば、先古典期終末期のマヤ地域の混乱と同時期に起こった社会変化が後代の人々の記憶に大きな影響を及ぼしたのかもしれない。

メソアメリカ南東部の社会の複雑化は、汎メソアメリカ文明の複雑社会の形成過程の流れと決して孤立無縁ではなく、各時期に広範な影響力を有した諸都市の直接的または間接的影響を受けつつ進行した。そして、社会情勢を的確に把握しつつ、在地特有の世界観や社会戦略を創造・継承、あるいは再編させながら社会を存続させていった。しかし、往時の世界観の核となる壮麗な火山を背景とする自然景観、翡翠・黒曜石・塩といった自然資源へのアクセスが良い地政学的立地、肥沃な土地など社会発展に必要と思われる環境は整っていながら、古典期マヤ低地の諸都市やテオティワカンのような国家がついぞ誕生することはなかった。

2-6. 中央アメリカ南部のニカラグア太平洋岸

ニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部はメソアメリカ南東境界を形成する。コスタリカ北部アレナル (Arenal) 湖畔では、前 2000 年紀の土器が見つかり、円弧を描く柱穴 (住居址)、磨製石器、調理に用いられたと思われる焼けた石、炭化物の付着した多くの土器片、さらにトウモロコシの植物遺存体などが確認されている [Hoopes 1994: 13-16]。同様な土器がニカラグア湖のオメテペ島 [Haberland 1992: 70-73]、マナグア湖畔の遺跡 [Espinoza 1995] でも発見されており、この時期に既に農耕定住村落が点在していた可能性を示唆する。これはメソアメリカの中では格段に早い。しかし、その後の社会発展は緩慢で、いつしか北のメキシコ中央高原やマヤ低地に追い越されてしまい、スペイン人侵略時まで国家と呼べるような大規模な複雑社会は出現しなかった。近年ニカラグアでの発掘調査では、先古典期に遡る豊富な副葬品を伴った集団埋葬墓が確認され [長谷川 2016: 230]、従来の想定より早い時期に社会の階層化や富の偏在が生じた可能性も議論されている。とはいえ、メソアメリカ古典期並行の時代を通して中核村落と周辺村落の二階層のセトルメント・パターンがみられるのみだった [Salgado 1996: 131-137]。

コスタリカ北西部では先古典期のオルメカ、古典期前期のマヤ低地とつながりを示す緑色石製品が数多く見られ、ニカラグア太平洋岸ではホンジュラスやエルサルバドルとのつながりを示すウスルタン様式土器が出土している [Lange 1992: 115-119]。また、グアテマラ高地産黒曜石製石器も確認されているが、これは南に下るにしたがって漸次的に出土量が減少することから、連鎖 (ダウン・ザ・ライン) 交換によってもたらされたものと考えられる [Braswell et al. 1995]。

古典期終末期と後古典期 (950 年～16 世紀) には、大きな社会変化がこの地に起こる。チョロテガ (Chorotega) とニカラオ (Nicarao) という民族集団がメキシコから移住したことが強く推認されるのである [e.g. Chapman

1960]。民族史と言語学資料からは、スペイン人侵略時に首長制社会を形成していた人々は、この移住に起源をもつ人々だったとされる。考古学資料からは、この移住は後 800 年頃と 1350 年頃の二度にわたって起こったと従来考えられてきた。後述するが、この歴史観は現在再検討を迫られている。この問題の解決に寄与する資料を得るため、長谷川らは、マナグア湖畔に所在し後古典期の良好な堆積を保つと思われる遺跡を選定して発掘した。

チラマティーヨ遺跡 [長谷川 2016; Hasegawa 2017] では、マナグア湖畔の小高い台地上の試掘により約 3,700 点の良好な土器資料、石器その他の遺物、そして後 1210-1275 年、後 1220-1280 年という放射性炭素年代が得られた。注目すべき点の一つは土器編年である。オメテペ (Ometepe) 期の土器と呼ばれる一連の土器が、従来後 1350~1550 年という絶対年代を与えられ、ニカラオの移住と関連するとされてきたが、これらが 13 世紀という年代測定値を呈している。また、オメテペ期の土器には、その前の時期で、現行編年で後 800~1350 年とされるサポア (Sapoa) 期の土器との層位的前後関係も見られない。両者は常に混在して出土する。さらに、もう一つの特徴は生業に関する遺物の種類であり、土製の錘や魚の骨、亀の甲羅といった水産資源の利用を示唆する遺物の豊富さと、植物遺存体、コマル (Comal) と呼ばれる土製フライパンや磨製石器などの農耕の痕跡の欠如または希薄さである。

同じくマナグア湖畔にあるラ・パス遺跡 [長谷川 2016; Hasegawa et al. 2019] では、ニカラグア太平洋岸では珍しいマウンド遺構の建築シークエンスを把握することができた (図 9)。この円形マウンドは最終段階で高さ 2.8m に達する。初期段階では掘っ立て柱式建物が建っていたようで、柱穴がある床面を覆う盛り土の放射性炭素年代は後 1045-1215 年であった。注目されるのは次の段階で、盛り土の上に方形の石造基壇が建設される。上部構造は有機質で造られており、その残骸である焼土片が基壇の周囲に散乱していた。言うまでもなく、方形石造基壇はメソアメリカの文化要素で、当該地域では極めてまれである。放射性炭素年代は後 1220-1280 年である。この基壇もやがて盛り土に埋められて最終的に円形マウンドに造り変えられる。盛り土から採取した炭化物の放射性炭素年代は後 1280-1390 年である。

さてラ・パス遺跡の出土物を見てもメソアメリカの文化要素は希薄である。黒曜石製石器は少なく、しかも押圧石刃はほぼ皆無であり、不定形な剥片が大部分を占める。植物遺存体はマウンド内部から出土したマメ科植物が目立つ程度で、トウモロコシの遺存体は出土せずコマルもない。この点、マウンドから離れた場所で居住区域の探索のために行われた試掘では、偶蹄類 (シカ、イノシシ)、ウサギ、食虫類の骨、魚骨が多く出

土しており、相変わらず狩猟や漁労に依存した生活様式を送っていたと考えられる。

以上の知見は、同じくニカラグア太平洋岸で行われた調査結果 [McCafferty 2010; McCafferty and Steinbrener 2005] と符合する。2000 年代に行われたカルガリー大学の調査団によるニカラグア湖湖岸のサンタ・イサベル (Santa Isabel)、エル・ラヨ (El Rayo)、テペタテ (Tepetate) の三遺跡の発掘によれば、やはりオメテペ期とされるコンテキストからの放射性炭素年代には後 1200 年を下るものがなかった。トウモロコシ農耕の痕跡は見当たらず、その代わりにラスパデ



図 9 ラ・パス遺跡、マウンド 1 西面

イータ (raspadita) と呼ばれ有毒マニオクの調理用と考えられる細石刃が多く出土する。黒曜石製石器などその他のメソアメリカの文化要素も欠如または希薄であった。さらに、国境を挟んだコスタリカ北西部でも同じ現象が見られる。1990年代に集中的な調査が行われたクレブラ (Culebra) 湾岸のいくつかの遺跡では、後古典期に漁業技術の進歩と水産資源への依存の増加が見られ、またオメテペ期の多彩色土器には13世紀以前の放射性炭素年代が得られていた [Gómez 1998; Hernández 1998]。

上記のように、古典期終末期と後古典期のメソアメリカ系民族の移住については、その年代と様態についての再検討が必要となっている。現状ではどのようなことが言えそうなのかみてみよう。まず後800年と1350年頃に移住が二度だけ起こり、その結果としてニカラグア太平洋岸がメソアメリカ化されたという図式は成り立たない。後800年頃に多彩色土器や埋葬様式が大きく変化していることは事実であり、これが北からの移住を反映しているというのはおそらく正しいだろう。だとしても、伝承から想像されるような大規模な集団がメキシコからニカラグア太平洋岸に直接到着したということではなく、実態としては中継地を通しての間接的移住であり、小規模な集団がいくつもの波となり漸次的に当該地域に浸透したと思われる。

マナグア湖周辺では、この時代の物質文化のパターンは多様である [長谷川 2016]。建造物は、ラ・パスのような大規模円形の石造マウンド、方形石造基壇に加え、マナグア市のネハパ (Nejapa) 遺跡の小規模円形石造マウンドがあり、チラマティーヨには地表に建築遺構が見られない居住跡もある。また埋葬様式は、この時期のニカラグア太平洋岸では甕棺埋葬が多いものの、マナグア市のロス・マルティネス (Los Martínez) 遺跡のように、石郭墓、甕棺埋葬、副葬品を伴う直葬が混在する例もあり、多様性が見受けられる。物質文化を民族と同一視することの是非はさておき、異なる物質文化を持つ人々が共存していた可能性がある。古典期終末期と後古典期に北からニカラグア太平洋岸への移住があったとしても、移住者たちは在地の人々と共存、混淆して、現地社会に与えた影響力は限定的だった。

ニカラグア太平洋岸では、上述のように農耕は早くから始まっていたが、大規模建築は建設されず、国家が出現することもなかった。古典期終末期と後古典期に移住したメソアメリカ系民族とされるニカラオやチョロテガが、トウモロコシ農耕民というメソアメリカ的な生業に背を向けて、湖や海岸の動物資源を利用し、干ばつに

強いマニオクを栽培していることは示唆的である。メキシコ中央高原やマヤ低地よりも雨季と乾季が明確なニカラグアでは、おそらく気候的にトウモロコシ栽培は難しく、マニオクがより安定的な食材として重宝されたと考えられる。保存がきくトウモロコシが安定的に供給されたメソアメリカに比べると、食料供給と人口増加に限界があったといえよう。

紀元前2000年紀に定住農耕村落が現れるにもかかわらず、ニカラグア太平洋岸での社会の階層化と複雑化は遅々とした歩みだった。先古典期後期から古典期前期の北の地域との土器、緑色石製品の遠距離交換も大きな社会変化を引き起こしたようには見えない。イデオロギーや天文知識を具現化したと思われる建造物は未発達であり、火山噴火や地震などの災害、環境変化、戦争が社会に与えた影響は未だ解明されていない。その中で注目される大きなイベントとしての後800年頃からのニカラオやチョロテガの移住であるが、移民たちがもたらした社会変化も、北の文明の中核部とのつながりを生かした政治権力の発達とは違う方向に向かった。おそらく、彼らは在地の人々を駆逐したり支配したりすることではなく、彼らと共存しながら

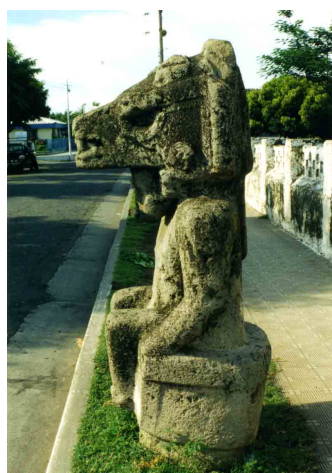


図10 ニカラグア、オメテペ島の石造彫刻

環境に適応した生業戦略をとった。ニカラグア太平洋岸のアルター・エゴ (Altar Ego) と呼ばれる動物と人間が一体化した石造彫刻は没個性的である (図 10)。このモニュメントは支配者個人の権威や権力の視覚化というよりも、共同体の成員の紐帯の象徴であったのではない かとと思われる。

3. 社会変化の要因の類似性と変異性

「世界四大一次文明」の一つをなすメソアメリカでは、どのように複雑社会が興り、形成され、衰退したのであろうか。本論は、人口変動、環境変動、戦争、交換、イデオロギー等から長期間の社会変化の諸事例に関する実証的なデータを提供する。

セイバルの先古典期中期の E グループは、マヤ文明の四方位や小宇宙の概念が既に形成されていたことを示唆する。初期の E グループはこれまで考えられてきたような支配層の権力の象徴ではなく、むしろ共同作業の場・公共祭祀の舞台であった。その建設や増改築、公共祭祀の繰り返しによって、様々なイデオロギーが共有されながら物質化 (materialization)、つまり具体的な形に視覚化されていった。セイバル最大の公共建築であった巨大基壇は、古典期ではなく先古典期に建造された。先古典期中期のマヤ文明では、巨大基壇の水平性が際立った。社会階層がまだ発展途上であり、開放的な交流が可能な水平的な空間が好まれたと考えられる [Inomata et al. 2019]。対照的に古典期マヤ文明の神殿ピラミッドは王権を象徴し強化する政治的道具であり、水平性よりもむしろ高さ、つまり垂直性が強調された。ピラミッド状基壇の上の神殿へのアクセスは排他的であり、王など一部の支配層に限られた。

メソアメリカ文明圏の南東端に位置するチャルチュアパでは、先古典期中期から高さ 20m を超えるピラミッド型の土製建築が造られた。先古典期後期は、全時期を通じて最も多くの公共建築群が造られた。先古典期に公共建築群の建設が集中する傾向はセイバルとも類似する。公共建築群は三角形に配置された三つの建築を一つのグループとし、その三つの建築に囲まれた広場の南北中心軸線上に石彫や供物が配置されるなど文化的景観に規則性が認められる。こうした公共建築や石彫の配置における規則性は同時期の主要センターであったカミナルフユでも認められる。

チャルチュアパの特徴的な点は各グループが同時期に機能していたのではなく、北から南に少しずつ遷移しながら建設されていった点にある。この点は複数の建築複合が同時期に機能し、緩やかな集合体を形成していたトラランカレカとは異なる。公共建築群は古典期においても建設され社会の中心であり続けるが、建材、様式、配置、中心方位軸などが一変する。公共建築内に厚葬墓が造られる点に鑑みるならば、先古典期とは異なり、古典期の公共建築はマヤ低地と同様に祖先崇拜と結びついていたのかもしれない。

上述のように、なぜ人々がある特定の地域に集中しそして離合するのかをトラランカレカ遺跡から考察する場合、観念体系の成熟過程と共有化、これに基づく物質化の動き及び観念体系の停滞を中心テーマとすることで論理的な説明が可能になる。観念体系の成熟過程と共有化は、自然景観の各要素 (山、川、洞窟など) に宗教的な意味を見出し、この各要素をシンボルとして直接崇める段階であり、トラランカレカ I 期から II 期に相当する。トラランカレカ II 期から III 期にかけ、先の観念体系に基づきシンボルは物質化されていく。その代表的なものはピラミッドの建造であるが、これは一カ所の「中心部」において実施されたのではなく、現在までのところ九カ所の建築複合で確認されている。トラランカレカ IV 期になるとポポカテペトル火山の噴火などの自然災害により、セロ・グランド建築複合において「水の山」が建造され、社会は一つにまとまっていくように見えるが、テオティワカンやチョルーラの台頭により、トラランカレカ社会は解体していく。

このトラランカレカ社会における盛衰を、セイバル遺跡やチャルチュアパ遺跡と比較すると興味深いことが見えてくる。三者ともに先古典期中期頃から公共建造物が建造されるが、古典期に入るとトラランカレカ社会のみが衰退していく。先古典期から古典期にかけて、セイバル遺跡では複数の社会から王を頂点とするより複雑な社会への変化が認められる。チャルチュアパでは王による統治形態であったかどうかは不明であるが、少なくとも一つのリネージによる支配体制への移行があったことが理解できる。一方、トラランカレカではこのような支配体制の変化は認められていない。

では、トラランカレカでは、王を代表とする絶対権力者集団が登場しなかったのでイノベーション能力を強固に発動できず衰退へと向かった、と理解できるのだろうか。トラランカレカの衰退後、テオティワカンや Cholula では、王を頂点とする社会が形成されていたと解釈できる痕跡は、物質文化から読み取ることはいえない。したがって、メソアメリカ文明における古典期社会への移行には、王の登場が必須であったとは言えない。筆者らはここに社会の類似性と相違性を見出す。人口が増加し社会がさらに階層化される古典期社会のメキシコ中央高原とマヤ低地を比較すると、権力は複数か単数の集団によって掌握される違いはあるものの、先古典期には断片的であった観念が体系化され、成員間で共有されていった。そして、より大規模に物質化されていくという類似性がある。今後の課題として、衰退と繁栄の分水嶺となったイノベーション能力が具体的にどのようなものであったのかについて考察していくことが必要とされる。

セイバル遺跡の調査によれば、居住の定住性の度合い、価値観やアイデンティティなどが異なる多様な集団が、共同体の公共祭祀及び公共広場や公共祭祀建築の建設・増改築（神殿・広場更新）を共同で行った。その過程で定住生活が確立されていき、集団が組織化されていった。先古典期中期には公共広場が公共祭祀の主要な舞台であり、供物や支配層の墓は古典期のように神殿ピラミッドではなく主に公共広場に埋納された。大規模な公共祭祀建築は定住共同体が確立された後ではなくそれ以前から建設されたこと、及び定住という新たな生活様式はセイバルの全ての社会集団の間で同時に起こらなかったことが重要である。全ての社会階層で定住が確立して都市化が進んだのは、先古典期後期になってからであった。

チャルチュアパの先古典期における都市化は、三角形に配置された三つの公共建築群を一つのグループとする建築複合が北から南に遷移する形で進んでいった。三つの建築に囲まれた広場では、様式化されたジャガーヘッドの石彫の建立に見られるように地域に根差した世界観に基づく公共祭祀が展開された。同時に、現在のエルサルバドル西部に相当する地域でウスルタン様式土器や黒曜石製石器の生産・流通拠点として発展していったことも人々が集住するきっかけを提供したことであろう。古典期前期に生じたイロバンゴ火山の大噴火による被害は大きな人口変動を促したと考えられるが、火口から約 40km 離れたサン・アンドレスや約 90km 離れたチャルチュアパではむしろ公共建築の建設活動は活発化する様相もうかがえる。ポポカテペトル火山噴火の事例と同様に、突発的な環境変化への対応や認識の違いによって都市が衰退することもあれば、逆に都市化や集住が進行することもあったことが重要である。

先古典期中期に共同建設作業や公共祭祀が繰り返し行われる過程で社会格差が拡大し、セイバルの共同体の中に支配層が生み出されていった。公共祭祀の通時的変化は、公共広場で顔を合わせる交流が、支配層の権力やイデオロギーを一方向的に表象していたのではなく、支配層も含めた共同体における異なった集団のせめぎ合いであったことを示唆する。先古典期中期に公共広場で繰り返し慣習的に行われた埋納儀礼を含む公共祭祀という反復的な実践は公共広場の神聖性を強化するとともに集団の記憶を形成した。社会的記憶の継承や連続性を資源化することによって、中心的な役割を果たす権力者の権力が時代とともに強化された。セイバルの初期支配層は、地域間交換ネットワークに参加して、グアテマラ高地産の翡翠や黒曜石、海産貝のような重要な物資だ

けでなく、観念体系や美術・建築様式等の知識を取捨選択しながら権力を強化した [Aoyama et al. 2017b; Inomata and Triadan 2016]。一方、セイバルでは戦争の激化によって社会が不安定になり、300 年頃に人口が激減した。

先古典期中期・後期のチャルチュアパに見られる規則性のある公共建築群の建設活動や石造記念物の存在は、支配層の存在を示唆するが、その権威や権力を後代のように厚葬墓として表象することはなかった。共同的性格の強い政治戦略の基に社会成員間の統合が図られていった。石彫の破壊や捕虜を示すような土偶の存在から破壊的行為や戦争があったと考えられるが、マヤ低地ほど社会の不安定化を促す主要因にはならなかったようである。大きな衰退をすることなく連綿と社会活動が続いていった点は、チャルチュアパ社会の特徴の一つといえる。

テオティワカン先古典期中期から発展したトラランカレカやクイクイルコなどを含むメキシコ中央高原の多様な社会との連続性の上に成立した。先古典期後期から古典期にかけての約二百年間で6〜8 万の人口を擁する大都市へ急成長したが、人口増加の発端はポポカテペトル火山噴火による社会的混乱と人口流入にあった。初期のテオティワカンでは丘陵斜面を中心としたセトルメントが営まれ、テオティワカン平野がほぼ未開発な状態で存在していたため、火山噴火から逃れた雑多な出自を持つ被災民は、この平野部に収容され定住した。多様な出自を持つ雑多な集団だったテオティワカン人は、これを機に未開の平野部へ新都市を建設するという共通目標を見出した。この共通目標が人々を惹きつける力となった。

先古典期中期から観念体系を成熟させ、大集落や都市へと変貌しつつあったポポカテペトル火山周辺やメキシコ盆地南部など先進地域から、自然災害という共通の記憶を共有した人々がテオティワカンへ流入し、新都市建設という一つの目標が設定されることで求心力が育ち、急速な社会の複雑化をもたらしただけではない。太陽のピラミッド、月のピラミッド、羽毛の蛇神殿など複数の中心部が存在する都市の発展過程は、セイバルにおける公共祭祀の通時的変化と同様に、出自や観念体系、階層を異にする集団によるせめぎあいの結果であったと捉えることができよう。

こうしたせめぎあいは、トラミミロルパ期に建設が開始されたアパート式住居複合においても見られた。それぞれの共同体の紐帯を深めつつ国家的統合を意図する試みが、特に住居区の小型基壇の建設や増改築、公共祭祀の繰り返しとして実践された。ショラルパン期に都市中心部の公共建造物の改築が落ち着き、アパート式住居複合の中でも地区神殿の増改築へ建設活動が集中していく。このことは、国家イデオロギーの成熟を表すとともに、支配者が求心力を失い、新たな権力が萌芽していったことも示唆する。要因は依然不明ながら、テオティワカンはショラルパン期末の550 年頃に衰退した。

古典期後期・終末期にはマヤの王権の性格が変化した。セイバルでは、王や支配層の戦士としての役割がより重要になった。エル・パルマールにおいては、王権の変化を示すエリート集団の派閥争いが顕著となった。都市王朝の周縁部に住むエリート集団の活動は、王朝内のみならず、時にはマヤ低地全体の社会政治の変化に影響を及ぼした。特に、古典期後期のマヤ都市王朝における政治組織の複雑化に主体的な役割を担っていたようである。エル・パルマールの事例から判断すると、ラカム集団は王朝間の政治交渉に不可欠な存在であったと考えられる。しかし、マヤ低地における彼らの活動は、均質ではなかったようである。例えば、マヤ低地西部から出土した碑文には称号を有する周縁部のエリート集団が頻繁に登場するが、マヤ低地東部では特定の遺跡群に限定されている [Jackson 2013]。

ここで留意すべきは、古典期マヤ低地の大都市のカラクムルやカラコルから出土した碑文には、彼らの活動がほとんど記されていないことである。すなわち、マヤの都市王朝は類似性を有しつつも、都市王朝毎の社会政治組織は異なっていた。王朝内においても様々な権力関係やイデオロギーが形成され、せめぎ合っていた [塚本

2016]。称号を持つエリート集団が碑文に記述されなくなる時期は、マヤ低地南部の衰退期と一致するために、社会の複雑化のみならず、衰退の一因をも担っていたと考えられる。

古典期後期のチャルチュアパは、先古典期とは大きく異なっていた。先古典期には文字や日付が刻まれた石彫や石碑祭壇複合のように石造記念物の建立やそれに伴う儀礼が、世界観や知識を物質化し、社会統合の核となっていたが、古典期には踏襲されなかった。一方で古典期マヤ低地では王権を強化する上で石造記念物の建立やそれに伴う儀礼が重要になった。チャルチュアパの支配層はメキシコ湾岸低地、マヤ低地、ニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部などかなり広範な地域間ネットワークを有していたようであり、特にコパン王朝と密接な関係があったとされる [Card and Zender 2016]。しかしチャルチュアパではマヤ低地のような都市国家を形成するまで社会の複雑化が進行することはなかった。このことはチャルチュアパが劣った社会であったことを必ずしも意味しない。むしろ盛衰の波の振れ幅が小さく、安定的な社会活動を長期にわたって展開できた点は積極的に評価されるべき点であろう。

チャルチュアパなどメソアメリカ南東部からさらに南、南東辺境ともいうべきニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部では先古典期前期に遡る土器が出土し、メソアメリカで最も早くから農耕定住村落が営まれていた。ある意味で、先進地域だったと言える。ところが、それに続くメキシコ中央高原やマヤ低地、エルサルバドルで複雑社会が誕生した時期に相当するものとしては、いくつかの土器型式が挙げられてはいるが、セトルメント・パターンについてはほとんど何もわかっていない。先古典期後期からマヤ低地で巨大ピラミッドが建設され、メキシコ中央高原でテオティワカンが勃興し、チャルチュアパでも大規模建造物が増改築される頃になっても、中央アメリカ南部では大規模建造物は建設されず、社会の複雑化と階層化は進展しなかった。

コスタリカでは、メソアメリカ中核部との交流を示す、オルメカ美術様式の緑色石製品（翡翠を含む）をはじめ豊富な副葬品をもつ埋葬遺跡が多数見つかった。ニカラグアでも、近年ウスルタン様式土器と在地の土器が大量に副葬された集団埋葬墓が見つかった。興味深いことに、翡翠をはじめとした緑色石製品はニカラグアではほぼ皆無である。この現象の説明として、コスタリカに未知の翡翠産地がある可能性やメソアメリカ中核部との交流がニカラグアを飛び越えて海路で行われた可能性を指摘できる。支配層による奢侈品の需要があったコスタリカに対し、ニカラグアでは階層社会は発達せず、貴重な工芸品を搬入する理由はなかったという意見もある [Salgado and Guerrero 2005]。コスタリカ北西部の埋葬遺跡も階層社会の存在を表していないとする見解もあり [Lange 1992]、この時期の社会統合の進行度についての議論は未だ決着していない。

続く古典期並行の時代には、前述のようにニカラグア太平洋岸では中核村落と周辺村落という階層化も現れるが、国家と呼べる社会の複雑化にはほど遠かった。コスタリカでは、それまで副葬品として多用されていた翡翠がなくなり、代わって南からもたらされた金製品が威信財として主流になるという興味深い現象が起こる。これをコスタリカ在地社会の社会構造やイデオロギーの変化と見る考え方がある [Snarskis 2003]。それとともに古典期マヤ低地、さらにその東端のコパン王朝が中央アメリカ南部との交流に消極的であり [長谷川 2005]、古典期マヤ文明の隆盛を背景としたマヤ低地での翡翠の需要が高まり、南への翡翠の供給が止まったと見ることできる。翡翠とは異なり、膨大な流通量を誇ったグアテマラ高地産黒曜石すらもエルサルバドル以南では極端に出土量が減った。ブラスウェルらは、黒曜石製石器の分布から見るとメソアメリカの南限はフォンセカ (Fonseca) 湾であると述べる [Braswell et al. 1995]。

やがて 9 世紀前後の古典期マヤ文明の衰退とともに各地で政治勢力の空白が出現し、民族移動が活発化する。この頃から中央アメリカ南部へと移住し、メソアメリカの南限を押し広げたのが、ニカラオとチョロテガであった。その移住が小規模で漸次的であったであろうことは上に示したが、彼ら移住者たちも大規模な複雑社会

を形成することはなかった。ニカラオやチョロテガが、この地域でメソアメリカ的な生業を採用せず、湖や海岸の動物資源に依存したのは、新たな環境への適応の必要性という他ないであろう。重要な物資である黒曜石製石器の搬入さえもままならなかったところを見ると、辺境の人々は時とともに故郷とのつながりも薄れ、交易品のみならず暦や農業生産などの実用的な知識や技術すらも移住先の地に導入することが困難だったのかもしれない。とはいえ、16世紀の年代記は人口稠密で繁栄したニカラグア太平洋岸の町々を描いている。これが誇張ではないならば、チョロテガやニカラオは辺境に取り残された人々ではなく、伝統にとらわれない大胆な生業戦略の転換で成功した開拓者だったとも言える。

4. まとめ

先古典期マヤ文明の複雑社会の起源・形成に関しては、公共祭祀を形作り物質化したイデオロギーは、地域間交換など他の要因と相互に作用して複雑社会の形成に重要な役割を果たした。メキシコ中央高原では、先古典期中期以降に「水の山」信仰を基にいくつかの拠点で都市化が開始された。この現象は先古典期終末期までは緩やかに進展していったが、ポポカテペトル火山の噴火などの自然災害によって、それまで確立していた交易システムは解体した。この社会の再編に伴い人口変動が引き起こされ、テオティワカン、 Cholulaそしてトラランカレカといった少数の都市に人口が集中するようになった。この社会変動の中で質的变化がもたらされ、イデオロギーの再構築が求められた。テオティワカンとCholulaにおいて、「水の山」はより人工的かつ巨大に物質化され、古典期という新しい時代が始まった。

テオティワカンにおいては、中央集権化後に台頭した新しいエリート集団による競合が都市の衰退に関与したと考えられる。古典期マヤ文明のセイバルの都市は人口増加や環境破壊だけでなく、戦争によっても衰退した。エル・パルマルにおいては、周縁部のエリート集団を含めた支配層の派閥争いが都市王朝の衰退に関係していたと考えられる。メソアメリカ南東部のチャルチュアパやサン・アンドレスでは、他地域の社会情勢や流行に柔軟に対応しながら社会を変化させることによって持続性の高い社会を形成していった。中央アメリカ南部は、古典期終末期と後古典期の民族移動によりメソアメリカ化したが、新たな環境への適応の必要性、移動・輸送手段及び地域間交換の制約により大規模な複雑社会は形成されず、16世紀にスペイン人が侵略した。

メソアメリカのどこで何が生まれ、どのように広がったかという伝播説なのか、それとも多元発生説なのかという検討は今後の課題である。マヤ文明の盛衰と環境変動の因果関係の検証も今後の課題として残った。セイバル近辺のペテシュバトゥン湖で全長 7.8m の完全に連続した年縞堆積物試料の採取に成功した [北場他 2019]。しかし年縞がカバーした年代は過去 600 年ほどであり、後古典期に相当する。先古典期・古典期マヤ文明の盛衰と降雨量など環境変動の因果関係を綿密に検証するためには、将来的により深く年縞堆積物試料を採取しなければならない。また植民地時代以降の年縞データの社会的な意味を考察するためには、古気象に関する文献史料との照合が不可欠である。メキシコ中央高原では、大きな社会的混乱の引き金を引いたポポカテペトル火山噴火の発生年と、その影響範囲は未だ正確には特定されておらず課題が残る。今後、コアリング調査の範囲を広げ、資料を蓄積する必要がある。

メソアメリカ南東部では公共建築とその周囲に関するデータは蓄積されてきているが、集住化や階層分化の過程を明らかにする上で重要と考えられる居住域や住居址のデータが不足している。これらのデータを獲得することによりマヤ低地やメキシコ中央高原など他地域との社会の複雑化に関する詳細な比較研究を進めることができる。中央アメリカ南部では、土器編年の精緻化が緊急の課題である。それを基にした各時期のセトルメン

ト・パターンの把握と生業形態の分析、未だ明らかとされていない 14～15 世紀の遺跡を同定することにより、この地域の社会発展の軌跡とメソアメリカ中核部との関連がより具体的に示されるであろう。

【謝辞】

本論は、平成 26～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」の計画研究 A02「メソアメリカ比較文明論」（代表：青山和夫、課題番号 26101003）の成果の一部であり、2018 年 12 月 21 日に東京で開催した計画研究 A02 研究会の諸発表とコメントを大幅に修正加筆したものである。2 名の査読者から極めて建設的な示唆があった。記して感謝します。

引用文献

Adams, Richard E. W.

1999 *Rio Azul: An Ancient Maya City*. University of Oklahoma Press, Norman.

青山和夫

2007 『古代メソアメリカ文明 マヤ・テオティワカン・アステカ』 講談社。

Aoyama, Kazuo

2017a Ancient Maya Economy: Lithic Production and Exchange Around Ceibal, Guatemala. *Ancient Mesoamerica* 28(1):279-303.

2017b Preclassic and Classic Maya Interregional and Long-Distance Exchange: A Diachronic Analysis of Obsidian Artifacts from Ceibal, Guatemala. *Latin American Antiquity* 28(2):213-231.

Aoyama, Kazuo, Takeshi Inomata, Daniela Triadan, Flory Pinzón, Juan Manuel Palomo, Jessica MacLellan, and Ashley Sharpe

2017a Early Maya Ritual Practices and Craft Production: Late Middle Preclassic Ritual Deposits Containing Obsidian Artifacts at Ceibal, Guatemala. *Journal of Field Archaeology* 42(5):408-422.

Aoyama, Kazuo, Takeshi Inomata, Flory Pinzón, and Juan Manuel Palomo

2017b Polished Greenstone Celt Caches from Ceibal: The Development of Maya Public Rituals. *Antiquity* 91(357):701-717.

青山和夫・嘉幡茂・市川彰・長谷川悦夫・福原弘識・塚本憲一郎

2017 「メソアメリカ文明の通時的比較研究序論」『古代アメリカ』20:79-94.

青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀

2014 「『古代アメリカの比較文明論』プロジェクトの目標と展望」『古代アメリカ』17:119-127.

2019 『古代アメリカの比較文明論：メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』京都大学学術出版会。

Beliaev, Dmitri, Alexandre Tokovinine, Sergio Vepretskiy, and Camilo Luin

2013 Los monumentos de Tikal. In *Proyecto Atlas Epigráfico de Petén, Fase I: Informe Final No. 1, Temporada abril-mayo 2013*, edited by Dmitri Beliaev and Mónica de León, pp. 37-170. Instituto de Antropología e Historia de Guatemala, Guatemala.

Braswell, Geoffrey, Silvia Salgado, and Michael Glascock

1995 La obsidiana guatemalteca en Centroamérica. In *VIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, edited by J. P. Laporte and H. Escobedo, pp. 102-112. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Cabrera Castro, Rubén.

- 2003 El proyecto arqueológico La Ventilla 1992-1994. Resumen de sus resultados. In *Contextos arqueológicos y osteología del barrio de La Ventilla: Teotihuacan (1992-1994)*, edited by Carlos Serrano Sánchez, pp.19-35. Universidad Autónoma de México, México.

Card, Jeb J. and Marc Zender

- 2016 A Seventh-century Inscribed Miniature Flask from Copan found at Tazumal, El Salvador. *Ancient Mesoamerica* 27(2):279-292.

Carmack Robert M., Janine L. Gasco, and Gary H. Gossen

- 2007 *The Legacy of Mesoamerica: History and Culture of a Native American Civilization*. Second edition. Prentice Hall, Upper Saddle River.

Chapman, Anne M.

- 1960 *Los Nicarao y los Chorotega según las fuentes históricas*. Universidad de Costa Rica. Publicaciones: Serie historia y geografía No.4, San José.

Coe, Michael D. and Richard A. Diehl

- 1980 *In the Land of the Olmec: The People of the River*. University of Texas Press, Austin.

Espinoza, Edgar

- 1995 La Cerámica temprana de Nicaragua y sus vínculos regionales. In *Descubriendo las Huellas de nuestros antepasados: El Proyecto Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua*, edited by Frederick Lange, pp.17-24. Alcaldía de Managua.

福原弘識

- 2017 「初期国家形成と政治戦略」『古代文化』68(4):84-92.

Grube, Nikolai

- 2008 Monumentos esculpidos: epigrafía e iconografía. In *Reconocimiento arqueológico en el sureste del estado de Campeche, México: 1996-2005*, edited by I. Šprajc, pp. 177-231. Paris Monographs in America Archaeology 19. BAR International Series 1742, Oxford.

Gómez Chávez, S.

- 2000 *La Ventilla, un barrio de la antigua ciudad de Teotihuacán*. Tesis de Licenciatura, ENAH, México.

Gómez, Ivonne J.

- 1998 El Conchal: Reflejo de la vida cotidiana. *Vínculos* 22:45-78.

Haberland, Wolfgang

- 1992 The Culture History of Ometepe Island: Preliminary Sketch (Survey and Excavations, 1962-1963). In *The Archaeology of Pacific Nicaragua*, edited by Frederick Lange et al., pp. 63-117. University of New Mexico Press, Albuquerque,.

Hasegawa, Etsuo

- 2017 Excavaciones en el sitio Chilamatillo (N-Ma-8-100), Municipio de Tipitapa, departamento de Managua, Nicaragua. *Revista Mi Museo y Vos*. Año 11, No. 33:24-37.

長谷川悦夫

- 2005 「7～8世紀の東南マヤ地域」『マヤとインカー王権の成立と展開』（貞末堯司編） pp.107-126、同成社。

- 2016 「中央アメリカ、ニカラグア共和国マナグア湖畔の考古学調査」『埼玉大学紀要 教養学部』51(2):223-241.
- Hasegawa, Etsuo, Jorge Zambrana, Mario Solano, and Orvin Zambrana
- 2019 Excavaciones en el sitio La Paz y Reconciliación, municipio de Mateare, Departamento de Managua, Nicaragua. *Revista Mi Museo y Vos*. Año 13, No. 34:2-29.
- Helmke, Christophe and Jaime J. Awe
- 2016 Sharper than a Serpent's Tooth: A Tale of the Snake-head Dynasty as Rocounted on Xunantunich Panel 14. *The PARI Journal* XVII(2):1-22.
- Hernández, María A.
- 1998 Manzanillo: Sitio costero multicomponente en la bahía de Culebra, Guanacaste. *Vínculos* 22(1-2):79-124.
- Hoopes, John W.
- 1994 The Tronadora Complex: Early Formative Ceramics in Northwestern Costa Rica, *Latin American Antiquity* 5(1):3-30.
- Houston, Stephen D. and David Stuart
- 2001 Peopling the Classic Maya Court. In *Royal Courts of the Ancient Maya, Volume 1: Theory, Comparison, and Synthesis*, edited by T. Inomata and S. D. Houston, pp. 54-83. vol. 1. Westview Press, Cumnor Hill.
- Houston, Stephen D. and Takeshi Inomata
- 2009 *The Classic Maya*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 市川彰
- 2017 『古代メソアメリカ周縁史—大噴火と大都市の盛衰のはざまで—』 溪水社。
- 市川彰・八木宏明
- 2016 「マヤ南東地域サポティタン盆地の編年再考—テフロクロロジーと土器の分析から—」『古代アメリカ』19:1-33.
- Inomata, Takeshi
- 2014 Plaza Builders of the Preclassic Maya Lowlands: The Construction of a Public Space and a Community at Ceibal, Guatemala. In *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*, edited by Kenichiro Tsukamoto and Takeshi Inomata, pp. 19-33. University of Arizona Press, Tucson.
- Inomata, Takeshi and Daniela Triadan
- 2016 Middle Preclassic caches from Ceibal, Guatemala. In *Maya Archaeology* 3, edited by C. Golden, S. Houston and J. Skidmore, pp. 56-91. Precolumbia Mesoweb Press, San Francisco.
- Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Victor Castillo, and Hitoshi Yonenobu
- 2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. *Science* 340(6131):467-471.
- Inomata, Takeshi, Jessica MacLellan, Daniela Triadan, Jessica Munson, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Hiroo Nasu, Flory Pinzón, and Hitoshi Yonenobu
- 2015 Development of Sedentary Communities in the Maya Lowlands: Coexisting Mobile Groups and Public Ceremonies at Ceibal, Guatemala. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 112(14):4268-4273.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Jessica MacLellan, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Juan Manuel Palomo, Hitoshi Yonenobu, Flory Pinzón, and Hiroo Nasu,

2017a High-precision Radiocarbon Dating of Political Collapse and Dynastic Origins at the Maya Site of Ceibal, Guatemala. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 114(6):1293-1298.

Inomata, Takeshi, Flory Pinzón, José Luis Ranchos, Tsuyoshi Haraguchi, Hiroo Nasu, Juan Carlos Fernandez-Diaz, Kazuo Aoyama, and Hitoshi Yonenobu

2017b Archaeological Application of Airborne LiDAR with Object-Based Vegetation Classification and Visualization Techniques at the Lowland Maya Site of Ceibal, Guatemala. *Remote Sensing* 9(6):563; doi:10.3390/rs9060563.

Inomata, Takeshi, Flory Pinzón, Juan Manuel Palomo, Ashley Sharpe, Raúl Ortiz, María Belén Méndez, and Otto Roman

2017c Public Ritual and Interregional Interactions: Excavations of the Central Plaza of Group A, Ceibal. *Ancient Mesoamerica* 28(1):203-232.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Flory Pinzón, and Kazuo Aoyama

2019 Large Artificial Plateau Construction during the Preclassic period at the Maya site of Ceibal, Guatemala. *PLOS ONE*:14(8): e0221943.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Flory Pinzón, Melissa Burham, José Luis Ranchos, Kazuo Aoyama, and Tsuyoshi Haraguchi

2018 Archaeological Application of Airborne LiDAR to Examine Social Changes in the Ceibal Region of the Maya Lowlands. *PLOS ONE* 13(2):e0191619.

Inomata, Takeshi and Lucia Henderson

2016 Time Tested: Re-Thinking Chronology and Sculptural Traditions in Preclassic Southern Mesoamerica. *Antiquity* 90(350):456-471.

Inomata, Takeshi, Raúl Ortiz, Bárbara Arroyo, and Eugenia Robinson

2014 Chronological Revision of Preclassic Kaminaljuyu, Guatemala: Implications for Social Processes in the Southern Maya Area. *Latin American Antiquity* 25(4):377-408.

Ito, Nobuyuki and David Stuart

2019 Chalchuapa: Capital regional en el occidente de El Salvador. *Arqueología Mexicana* 155:82-87.

Jackson, Sarah E.

2013 *Politics of the Maya Court: Hierarchy and Change in the Late Classic Period*. University of Oklahoma Press, Norman.

Joyce, Arthur A., Sarah B. Barber, Jeffrey Brzezinski, Carlo J. Lucido, and Victor Salazar Chávez

2016 Negotiating Political Authority and Community in Terminal Formative Coastal Oaxaca. In *Political Strategies in Pre-Columbian Mesoamerica*, edited by Sara Kurnick and Joanne Baron, pp. 61-96. University Press of Colorado, Boulder.

Kabata, Shigeru, Tatsuya Murakami, Julieta M. López J., and José Juan Chávez V.

2014 Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico: Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla 2012-2014. *Boletín del Instituto de Estudios Latinoamericanos de Kyoto* 14:73-105.

- 2019 『テオティワカン―「神々の都」の誕生と衰退―』雄山閣。
- 嘉幡茂・村上達也
- 2015 「古代メソアメリカ文明における古代国家の形成史復元：『トラランカレカ考古学プロジェクト』の目的と調査動向」『古代文化』67(3):99-109.
- 嘉幡茂・村上達也・フリエタ マルガリータ＝ロペス ファレス
- 2017 「自然景観を取り込んだ古代都市：トラランカレカ」『古代文化』68(4):75-83.
- 嘉幡茂・村上達也・フリエタ マルガリータ＝ロペス ファレス・ホセ ファン＝チャベス バレンシア・福原弘識
- 2014 「メキシコ中央高原における初期国家形成の解明に向けて―トラランカレカ考古学プロジェクト―」『古代アメリカ』11:53-71.
- 北場育子・大森貴之・星野安治・原口強・中川毅・那須浩郎・ヘンリー・ラム・五反田克也・林田明・デイビッド・デットマン・篠塚良嗣・山田和芳・藤木利之・大山幹成・フローリー・ピンソン・猪俣健・青山和夫・米延仁志
- 2019 「マヤ低地に眠る奇跡の地層：刻まれた気候変動の足跡」『古代アメリカの比較文明論：メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』（青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀編）pp.48-60, 京都大学学術出版会。
- Lange, Frederick W.
- 1992 The Search for the Elite Personages and Site Hierarchies in Greater Nicoya. In *Wealth and Hierarchy in the Intermediate Area*, edited by Frederick Lange, pp.109-139. Dumbarton Oaks Library and Research Collection, Washington D.C.
- Love, Michael W.
- 2018 Kaminaljuyu Chronology and Ceramic Analysis: An Alternative View. *Latin American Antiquity* 29(2):260-278.
- Martin, Simon and Nikolai Grube
- 2008 *Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*. Second edition. Thames & Hudson, London.
- McCafferty, Geoffrey
- 2010 Ten Years of Nicaraguan Archaeology. Paper prepared for the 2010 Meeting of the Society for American Archaeology, Sacramento, CA.
- McCafferty, Geoffrey and Larry Steinbrenner
- 2005 Chronological Implications for Greater Nicoya from the Santa Isabel Project, Nicaragua. *Ancient Mesoamerica* 16(1):131-146.
- Millon, Rene
- 1981 Teotihuacan: City, State, and Civilization. In *Supplement to the Handbook of Middle American Indians*, vol.1: *Archaeology*, edited by V. R. Bricker and J. A. Sabloff, pp. 198-243. University of Texas. Press, Austin.
- Millon, Rene, B. Drewitt, and G. L. Cowgill (eds.)
- 1973 *Urbanization at Teotihuacán, Mexico* Vol. I, Part 2: The Teotihuacan Map: Maps. University of Texas Press, Austin
- Murakami, Tatsuya, Shigeru Kabata, Julieta M. López J., and José Juan Chávez V.
- 2017 Development of an Early City in Central Mexico: Preliminary Results of the Tlalancaleca Archaeological Project. *Antiquity* 91(356):455-473.

Murakami, Tatsuya, Shigeru Kabata, Julieta M. López J., and Paige Phillips

- 2018 A Multi-Method Approach to Reconstructing Occupational History and Activity Areas: A Case Study at the Formative Site of Tlalancaleca, Central Mexico. *Journal of Field Archaeology* 43(8): 634-654.

那須浩郎・藤木利之・山田和芳・篠塚良嗣・大山幹成・米延仁志

- 2019 「マヤ文明の盛衰と環境変動—セイバル遺跡とラス・ポサス湖に記録された農耕と森林利用の歴史」『古代アメリカの比較文明論：メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』（青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀編）pp. 38-47, 京都大学学術出版会。

Nichols, Deborah L. and Christopher A. Pool (eds.)

- 2012 *The Oxford Handbook of Mesoamerican Archaeology*. Oxford University Press, Oxford.

Palomo, Juan Manuel, Takeshi Inomata, and Daniela Triadan

- 2017 Mortuary Rituals and Cranial Modifications at Ceibal: from the Early Middle Preclassic to the Terminal Classic Period. *Ancient Mesoamerica* 28(1):305-327.

Rosenswig, Robert M.

- 2019 The Izapa Kingdom's Capital: Formative Period Settlement Patterns, Population, and Dating Low-Relief Steale. *Latin American Antiquity* 30(1):91-108.

Salgado, Silvia

- 1996 *Social Change in a Region of Granada, Pacific Nicaragua (1000B.C.-1522A.D.)*. PhD dissertation, State University of New York, Albany.

Salgado, Silvia and Juan Guerrero

- 2005 La distribución de la jadeíta en Centroamérica y su significado social. In *Cuaderno de Antropología* No. 15:53-64. Universidad de Costa Rica.

Sharer, Robert J.

- 1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.

Snarskis, Michael

- 2003 From Jade to Gold in Costa Rica: How, Why and When. In *Gold and Power in Ancient Costa Rica, Panama, and Colombia*, edited by J. Quilter and J. Hoopes, pp.159-243. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Thomas, Prentice M., Jr.

- 1981 *Prehistoric Maya Settlement Patterns at Becan, Campeche, Mexico* Publication 45. Middle American Research Institute, Tulane University, New Orleans.

Tsukamoto, Kenichiro

- 2014 Multiple Identities on the Plazas: The Classic Maya Center of El Palmar, Mexico. In *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*, edited by K. Tsukamoto and T. Inomata, pp. 50-67. The University of Arizona Press, Tucson.
- 2017 Reverential Abandonment: A Termination Ritual at the Ancient Maya Polity of El Palmar. *Antiquity* 91(360):1630-1646.

塚本憲一郎

2016 「古典期マヤの都市国家におけるイデオロギーのせめぎあい―メキシコ合衆国エル・パルマル遺跡の考古学調査と碑文解読から―」 『考古学研究』 62(4):71-90.

2017 「古典期マヤ文明の広場と政治権力」 『古代文化』 68(4):66-74.

Tsukamoto, Kenichiro, Javier López Camacho, Luz Evelia Campaña Valenzuela, Hirokazu Kotegawa, and Octavio Q. Esparza Olguín

2015 Political Interactions among Social Actors: Spatial Organization at the Classic Maya Polity of El Palmar, Campeche, Mexico. *Latin American Antiquity* 26(2):200-220.

Tsukamoto, Kenichiro and Octavio Esparza Olguín

2015 Ajpach' Waal: The Hieroglyphic Stairway at the Guzmán Group of El Palmar, Campeche, Mexico. In *Maya Archaeology* 3, edited by C. Golden, S. Houston and J. Skidmore, pp. 30-55. Precolumbia Mesoweb Press, San Francisco.

Webster, David L., Barbara Fash, Randolph Widmer, and Scott Zeleznik

1998 The Skyband Group: Investigation of a Classic Maya Elite Residential Complex at Copan, Honduras. *Journal of Field Archaeology* 25(3):319-343.

A Comparative Study of the Origins, Formation and Decline of Complex Societies in Mesoamerica

Kazuo Aoyama (Ibaraki University), Shigeru Kabata (Kyoto University of Foreign Studies), Kenichiro Tsukamoto (University of California, Riverside/ Yamagata University), Akira Ichikawa (Nagoya University), Hironori Fukuhara (Saitama University), Etsuo Hasegawa (Saitama University)

Keywords: complex societies, comparative study, Mesoamerica, demography, ecology, warfare, ideology

This paper examines and compares when, where, why and how complex societies emerged, developed and declined in the Maya lowlands, Central Mexico, Southeastern Mesoamerica and Lower Central America. Ideology expressed in material form in aspects of public rituals and public ceremonial structures, along with other factors such as interregional exchange, played a significant role in the development of Preclassic Maya complex society. In Central Mexico, urbanization started at several centers, based on the belief system of “Water Mountain” during the Middle Formative period. Large urban cities, such as Teotihuacan, Cholula and Tlalancaleca, developed as an adaptive politico-religious response as people sought to cope with the ecological, social, political, economic, and ideological conflicts that certainly developed in the wake of a huge volcanic eruption of the Popocatepetl volcano, which took place around A.D. 70. Factors for the fall of the Classic Maya city of Ceibal include population growth, ecological degradation, as well as warfare. Elite competition, including individuals associated with outlying groups, was related to the dynastic collapse at El Palmar. The highly competitive intermediate elite introduced tensions that set the stage for Teotihuacan’s collapse. In Southeastern Mesoamerica, elites of such centers as Chalchuapa and San Andres, seem to have been an important node linking exchange networks that extended from highland Guatemala and other regions and achieved a relatively sustainable society. The Chorotega and Nicaraos, who immigrated from Central Mexico to the Lower Central America, were not associated with complex state-level societies, due to the difficulties of adapting in a new environment, their limited transportation system as well as their limited participation in a down-the-line sort of exchange network with Mesoamerica.

原稿受領日 2019年8月14日

原稿採択決定日 2019年10月11日